

普遍を求めて：

犬養道子の「六日目の旅」

井上 央

序：和を求めて

私たちが生きているこの今、この時代とは、どんな時代なのか？

私たちはどこから来て、どこへ向かっているのか？

その中で、私たちはどう生きる？いま何をすべきか、何ができるのか？

ここに一人の人物がいる。戦前の日本で生を受け、戦後活躍を続けた知識人の中で、だれとも違う道を歩んだ。その彼女は、ものごとを出来るだけ広く考えずにはいられないと、自分を評した人物でもある。その名前は犬養道子。現代社会のクリティークとして、稀に見る才能を発揮してきた。彼女の半世紀を超える活動を評価するには、いくつもの角度から試みることができるだろう。彼女が挑んだ問題領域の拡がりには人並みならぬものがある。その中でもここでは、彼女の仕事を的確に評価する上で最も重要な側面、現代日本にあって彼女の活動の意義を考える上で最も価値ある側面、キリスト教（カトリック*1）文筆家としての犬養に注目することになる。

世紀にわたる人間の歴史の中でキリスト教が果たした大きな役割（特に欧米世界において）を無視するものはない。一方、今私たちが生きるようになった二十一世紀世界において、キリスト教はどう理解されているのか？どんな地位を与えられ、どんな役割を果たしているのか？現代世界にあって、いまだいかなる意味を持ち、いかなる役割を果たし得るものなのか。このような問いに正面から向き合おうとする時、キリスト信徒として特別な導きのうちに歩んだ犬養の著述ほど、示唆に富むものは少ない。

犬養は 1944 年 12 月、米軍爆撃機の空襲の脅威に曝されながら、上智学院聖堂でドイツ人神父から洗礼を受けた。戦時中キリスト教が社会的に禁圧下に置かれたその最中、しかも多くの日本人の目に、プロテスタントに比べても、保守の極みと映るカトリック教会の神父の手によってだった。犬養にとってカトリック信徒となることとは、彼女の残りの人生の決定的な方向付けをするこの決断とは、どの

ような意味を持つものだったのか。

犬養はキリストのメッセージを今を生きるものに伝えようと続けてきた。福音、神のことばであるイエスの福音である。カトリクであろうが、プロテスタントであろうが、不変で普遍的な根本。犬養を数多の研究家、教養家、リベラル・クリスチャンとは違うものにする決定点である。

彼女の取り組んだのは福音の“現代化”（アジョルナメント）であったと表現しよう。今ここで、この語をヴァチカン第二公会議が用いた意味で使おう。まことの福音をいまを生きる私たちに伝えること。この「現代化」は「非神話化」*2 とは、響きが似て非なるものである。

犬養のキリスト教／信仰／聖書分野での初期主要著書に『旧約聖書物語』（1969）と『新約聖書物語』（1976）がある。『新約聖書物語』の上梓にのぞんで、彼女はその後がきにこう書いた。

「ただ、自分が人間存在の意味を求めて苦しみぬいた青春の日、答えを与えてくれ、今日も与えつづけてくれる、それゆえ私にとって最愛の書...を、日本の現代人に『分かる形』にしてみたいと、そのみを願った」*3

私たちはここに、戦前に遡る犬養の魂の遍歴の中で、彼女と「聖書」との出会いがあったことを見てとる。それがどのようなものであったのかを辿ることから始めたい。

犬養の歩みの示す意味を理解しようとする時、その道がいくつかの重要な出会いによって、導かれ、かたちづくられて行ったものであることが分かる。

私たちの手元には、最初の重要な手掛かりとして二冊の自伝的著述『花々と星々と』（1970）と『ある歴史の娘』（1977）がある。両巻は、この国の大戦への歩みの証言者となるため特別な場所にいた人物による、実に重要な戦前史でもある。と同時に、犬養の幼少期に始まり、受洗に至るまでの「心の遍歴と形成過程」が「一種小説めいた短編」の連作として描かれている。私たちはこれを彼女の「魂の記録」として読むことができる。*4

犬養は、1932 年の五・一五事件で暗殺されることになる首相犬養毅の孫として、1921 年東京に生まれた。大戦前とは、人々の世界が分裂の極みに達し、破局へと突き進んだ時代だった。混乱に苦しみあえぐ世界のしるしに隣り合わせて育った犬養、その彼女の思いの最も奥深くに、いくつもの種子がだれかによって植え付けられていった。その一つは耐え難い心の分断を癒す、和への憧れだったのだ。

こののちに姿を現す犬養の生涯を支える、その精神を象徴するようなエピソードを、後巻『ある歴史の娘』の中に見つける。上海租界で、抗日運動に身を挺する

中国青年たちと若き犬養との出会いの一場面である。

1941 年 2 月、場所は日中戦争泥沼化の中にあえぐ上海。当時二十歳そこそこの“小娘”だった彼女は、名義の違う三つのパスポートを持って中国に入学した。極秘裏に行われ失敗に終わった（「善意さえあればことは運ぶと愚かに信じた」人々による）日中平和工作に携わる父、犬養健のあとについて、いわばカモフラージュ役として。日本人離れした“国際派”、ことに稀有の“欧米通”としてやがて知られることになる彼女が、最初に踏んだ異国の土は、中国の土だったのだ。

最初に滞在したフランス租界、その街を初めて歩いた朝、ボロボロのように通りに横たわる餓死・凍死体に失神しそうになった。それでも冒険心に満ちた彼女は、やがて場末へ場末へとたった一人で散策の足を延ばすようになる。そんなある日犬養は突然目の前に現れた中国人過激派学生たちと出くわす。大書された「殺、東洋鬼、抗日抗汪、革命万歳」のビラを壁に貼る彼らと視線が合う。洋装で一目で日本人とわかる彼女が引き返すにはもう遅すぎた。

咄嗟、自分を指差し「私も東洋鬼」、大声で学生たちに叫びかける彼女。一瞬呆気にとられる彼ら。

祖父犬養毅や、彼の宅の食客だった中国人留学生たちを通して親しんでいた、中国の“書”への造詣を、急ごしらえの対話の材料にしつらえた犬養に、“過激派”青年たちは応じた。以下、引用を少し：

「上海で何をしてるね」

「日本軍を追い出そうとしている。東洋鬼にもいろいろある。私はこれでも孫文先生のまた弟子だからね」

学生たちは大笑いをした。春の空を仰いでいつまでも笑い、つくづく私を眺めて、「不思議な東洋鬼だ。いつか会えるかね」

「朝この時間に歩きに来るから」

じゃあ再見よと学生たちは口々に言い、しばらくためらってから、さいしょのひとりが、手をさしのべた。「握手しよう」。それから素早い行動で壁に向かうと貼り残してあったビラを乱暴にはがし、丸めて破いて道に棄てた。

再び笑って明るく言った。「日本のお嬢さん、じゃ、いつかまた」

その後、二、三度私はその長い壁のところに行って見た。しかし学生は二度と来なかった。ビラもなかった。私は彼らのことを時々考えた。あの若者たちはどうなるであろう。この戦乱を生きのびるであろうか、毛沢東の『新しい』軍と思想を待つのであろうか。*5

1、「普遍」との出会い

犬養の自伝的二巻に描出された半生の物語の一つの大きな節目が、十一才という年齢で迎えた 1932 年 5 月 15 日であったことは疑いようがない。引き裂かれた世界が幼い犬養の前に、ぱっくりと口を開いた。犬養自身は書く。

「そして私自身、五・一五を契機として、ただもう光り輝く花々と星々の幼年時代を出ていたのであった。...あの午後をさかいに移ったのだった...真空地帯とも呼べる人生の無垢の時はもはや永劫に去っていた。...祖父を弔うというよりはむしろ、去っていった光の時代の弔いのため」送る日々が幕を開けた。*6

ここで私たちが次に着目したいのは、犬養の生の歩みの原点には、やがて失われることになる「光り輝く花々と星々」の時代なるものがあったと語られることだ。そのことが、読者に訴えるように、はっきり書きとめられている。この幼い犬養の体験した夢の“理想郷”について、私たちは次に注目する。

その思い出を、犬養自身、“白樺派の理想”と呼んだ。

犬養は 1998 年刊の自選集の解説に書く。*7 昭和史のただならぬ出来事の体験目撃者の記録を期待している編集者から（自伝『花々と星々と』の）執筆依頼を受けた時、自分の心にあざやかによみがえって来たのは、あの五・一五前後の思い出ではなく「白樺派文士の父を持ち音楽に夢中の母のもとで、（彼らの友人たち）に賑やかに取り巻かれて育った『東中野千七百』の日々のことどもであった」のですと。それは「チイグウと呼ばれた無二の親友のぬいぐるみの熊、トム・ソーヤーの名前を持つドイツ生まれの人形『かしこい男の子』」の思い出。相撲取りごっこに明け暮れる岸田劉生、トルストイ談義を四、五歳の女の子相手に熱っぽく語るような武者小路実篤、チイグウごっこを教えこんだ抗日派の「シナの戴さん」戴天仇の思い出だった。

犬養は自分を形作った原風景について述懐する。「朝鮮も中国...もロシアもヨーロッパもアメリカも中南米も日本も、美と善という普遍の世界において国境を持たない、民族差も持たない、『個に徹せよ、徹したとき個は普遍なる人類の心に入ってゆく』といった風の理想主義が、幼児をもひきつけてしまう音楽やおびただしい画集（私は子供向の絵本というものを知らずに育った。絵本は古今東西の画集だった）を通して私の内にしみこんだ。人生最初の七年を包んだのが、白樺派の人々だったからである」と。人間一人残らずに何よりもまず与えられていたはずの素晴らしい祝福、人が人として生きる、人とともに生きる喜び。幼い子ども時代、彼女は何よりも早くそれを味わい噛みしめる恵みを受けたのだ。

そして次に、それとは別の、犬養を犬養にしたもう一つの出会いに目を向けよう。もう一つの「普遍的」体験、それは上のような「樂園的」なものではなかった。彼女がこの世の矛盾と謎、見知らぬ顔をした現実、恐怖にすくみながら直面した出来ごとだ。

『花々と星々と』の第一章で取り上げられたエピソード。犬養は晩年の著書『このころの座標軸』の終章「“時”をめぐって考える」でも、同じエピソードを六才の時に向き合った人生最初の「哲学的経験」あるいは「宗教的経験」、「ロンドン娘事件」と呼んで取り上げている。^{*8} その時、母の言いつけをなおざりにした幼い犬養は、手を滑らせてロンドン生まれの可愛らしい陶器人形を割ってしまった。

「もし、していなければ。母の言いつけどおりに。どうしてしてしまったのか！」著者の幼い心は生まれて初めて、まだ名前も知らない感情を味わった。それは「悔い」だった。

「あの平穏でしあわせな状態——不可思議なこのころの疼きのいまだ片鱗すら生まれていなかったときのあの安らかに万物万象のたのしかった状態——あれを取り戻すすべはないものか」。いや必ずあるにちがいないと六才の少女は懸命に考えた。火照る頭の中で、ただ一心に。そのとき幼い犬養の心に「素晴らしい考え」が浮かんだ。それは「万能」のお手伝いさん、茂が披露しためざましい力だった。進んだ時計の針を戻して時間を戻すこと。そして、それが出来ないということ、穏やかに父に諭された時に味わった「なんとも表現できない恐怖」^{*9}

それは「人間行為の一回性と、偏在する『時』に包み込まれて『とり返しのつかない行為を、いくつもいくつもくり返しながらかゝ生きてゆく人間の偶有性』とを初めて知った」午後だった、と晩年のエッセイで回想する。

そして時をおかず彼女を見舞ったもうひとつの辛い経験、それは小さい子どもに長く苦しい療養生活を強いる病、結核だった。病は彼女の人生を通してくり返しくり返し訪れ、乗り越えるべき試練として、彼女に語りかけ続ける役割を果たすことを私たちは知る。

「じゃあ病気って何なのよ」「なぜ病気なんてあるのよ」「なぜ元気な人と病気の人とあるのよ」小さな少女は問わずにはいられなかった。「人生における苦しさの意味」、すべての人間がいつかは問うこと強いられる「苦というものの存在の意味」を自分が考えはじめた最初だった、と犬養は書く。それがやがて「生とは何か、死とは何か」というさらに切実な問いの導入部となり、「だが、答えが、キリストという形をとって与えられるまで、私はまだ十八年も待たなければならない…」と、この述懐は締めくくられるのだ。^{*10}

そんな彼女を、十一才の年に五・一五事件が襲った。

なぜ苦、悲しみ、信じられないような悪は存在するのか？どこからやってくるのか？これら問いが、若き日の犬養の心の一番深くから去ることはなくなった。

だがこの事件が犬養に残したものは、単純な人間不信ではなかった。彼女の心の中に植えつけられた種。

「祖父を撃ち殺した人々への恨みをこれっぽっちも抱かなかった。...あれは下手人がだれであれ来るべくしてきた事件であり...多くの、理解できぬことどもが私を動転させたのである」。事件をキッカケに犬養は祖父の知らなかった一面、プライベートな側面を知ることになる。「この家は...憎しみによって建てられているみたいだ...どうして？」*11

ここに彼女の魂の遍歴を際立たせる重要な要素の一つ、自伝的二冊を貫く大切なテーマの一つ、が浮かび上がる。求めること。魂の希求。求めよ、のテーマである。

「本当の勉強をして...五・一五のような事件のもとになる狭くやりきれぬナショナリズムをなくしてしまう仕事を一生かかってやろう」「明るいしののめの七彩の空の、光かがやくのがほとんど見えてくるのであった。が——その明るさにたどりつけるのはいつであろう」十代前半の犬養は思った。「道ちゃん、自分でねえ見つけていかなくちゃならない答えがあるのさ...」父のことば。そして「万の数に近い...書庫の前に、鍵の束を手にして私がひとり立ったのは、それからまもなくことであった」*12

『ある歴史の娘』の中で、当時（昭和十一年）の自らの心中をこう回想する。「学問の真に目指す究極の目的（それは生の意義の解明のように私にはそのころになると思われた）は、時と、『歴史の進歩』によって左右されるものなのであろうか...『いくら学んだとて、いくら知ったとて』交替のきく偶然のものならば、ああ、ついには無ではないか」。どんな小さな者にも与えられ得る「真理というもの」がもし存在するなら、それをこの自分に示してほしいと、ただ叫ぶように、呼ぶように「その夜私は、はじめて祈ったのである。最も正しい意味において祈ったのである。かくされている人生の究極の『答え』に向かって」と犬養は書く。祈り、のテーマ。*13

そんな日々の彼女のロール・モデルとなった、もう一人の人物に触れておこう。母方のおじに当る外交官斉藤博。戦争へと至る日々、駐米大使としてアメリカと向き合い、反日感情高まるなか「すべてのアメリカ人に愛された日本人」。日米

関係改善に全力を尽くしつつ、力果ててワシントンで斃^{たお}れた。彼はまた「美男」であったと言ひ添えられる。「この博さんはまたアメリカに行くのだなあ...見ているうちに、何かがふと、胸に湧いたようであった。願望のような、理想のような、希望のような、志のような、...そう、あれは私の抱いた、最初の『こころざし』であった」*14

彼女は、理想に駆り立てられ英語力を磨くために学習院から津田塾に身の置き場を変えた時の驚きと「苦悩」を『ある歴史の娘』の中で語っている。

「要するに私は、落ちついた、満ち足りた、まともな娘ではなかったのである。...政治外交中枢部の（それゆえに時代と歴史についてあるていど『知っている』）人々の娘を多く抱える学習院とちがい、新聞やラジオの報道を『そのまま』信じてしまう善良な市井の人々の娘を学生とする津田で日毎に（そういう苦悩を）味わったものである。...（大勝利なんてとんでもない）実はいのちとりなんだよ、日本は亡びに向かって走ってるんだよ！そう叫びたかった」。*15 これは 2010 年代の我々が、この今、ど真ん中に置かれている社会現実の一つではないか。

その一方で、犬養を取りまくすべては、自分の中にある“否定的なもの”、悪、エゴ、自分中心、と向き合うことを強いるようになっていった。彼女は当時の苦しみを追憶する。

「不思議な欲求の大群...美しい夢...今を楽しめばそれでよいのではないか」「ただならぬ昭和史ちゅうのただならぬことどもの中心部ぎりぎりに置かれた環境は異常でありすぎた」。彼女は自ら愛した父と母の関係が冷えきるただ中に立たされた。そのとき生まれてはじめて自分の父と母を憎んだ、と告白する。憎しみが何の役にも立たないこと、「氷を解きえる」のはただ暖かさであることが、理性では分かっていたにもかかわらずだ。そして気づいた、と彼女は言う。「おのが内面の分裂に。なすべきことをなしえない分裂に。己の内面すら、ひとつに調合できない、統合し統べることの出来ない弱さに」「われはまだ生まれ出ていなかったのだ!...集めるのだ!...しかし集めるとは、どうやって？」こんな愚きわまりない「人間」が至上であってたまらない。「『われ』とは何かの答えが見つからないなら、死んだ方がいい」。その頃ころの中から「自殺」の考えがつねに去らなくなっていた、と犬養は書く。そして、そんな考えに反発するかのよう、エピキュリアニズムのようなものも同時に、自分の心の中で力をふるい始めた、と。*16

私たちは冒頭で紹介した上海抗日青年たちとの出会いエピソードの主人公が、ど

んな道を辿って、どんな状態でその場所に立っていたかをふり返ってきた。その出会いの出来ごとのあと、上海租界で、工作活動に奔走する父の目を盗んで、一人残された犬養は大胆にも「エゴの実験」に身を投じたことが告白される。

「もしも人生が、この可見の地上にのみに限られて、死が万事に終止符を打つものであるならば——言いかえれば人間精神の不滅性が真でないならば——一切の道徳律は無意味」と考えを進める若い日の犬養は自分の満足、物質的欲望を全開にしてみようと心に決める。それで心が、魂が充たされるか？心の底の底で叫び続ける良心を抑えつけて行ったとき、いかなる体験をするのか。ある意味答えは分かっていた、と犬養は書く。彼女はアメリカ東海岸アイビーリーグ出身、もとフットボールキャプテン、ロックフェラーの成功談やアリゾナ・スイスの邸宅的生活にしか興味ない財閥の青年と恋愛芝居を演じることに全精力を傾ける。上海上流階級のご用達の店で調達したドレスで身を飾り（父をごまかして軍票で現金を得る）高級クラブで華やかに過ごすうち、ついに限界に達する。「もし今夜事故でも死んだら、私はこの空しさの中で、一回きりの人生と分かれるのか」。彼女はいたたまれなくなり、その場を逃れ去る。自室にたどりつき鏡の前に立った時、そこに映ったなんと惨めで哀れな自分の姿。「内において満たされた者になりたい！...生きる者になりたい。もしそのような福の源があるならば、人の魂を満たす存在があるならば、それをどこにもとめたらよいかをこの惨めな者に示して下さい...」 *17

戦中の日本に帰国したのちも彼女の心の葛藤は続いた。

「インターナショナルな明るい普遍価値を『築きたい』と願う！何という嘘つき！」「己の精神の蘇生から始めねば...。己の内部の悪党どもあまとせめて勇ましく戦うようになれたとしたら...。人間にとって...魂こそ、存在理由であろうに」。高い理想と自らの現実をひとつにまとめることが出来ない。

この美しい「林檎」。だが明日には変わる。自らに清冽な光を与えてくれた「美」さえも普遍の実在ではない。自分は「問い」から逃げようとしていただけなのか。「自殺の強迫観念」もいまだ彼女を脅かし続けた。

そして決定的な出会いの時の訪れ。三階の書庫。祖父と父の。絶えて見つけなかった本。「新約聖書」。目に飛び込んだ一行「求めよ、さらば与えられむ。叩け、さらば開かれむ...」 *18

犬養は求めたのだ。魂が。

聖書の中に「狭き門...『力を尽くして入れ』と招く者」がいる。生と死の間に立

ち尽くすもの、自らの中に住む悪（「殺人者はわが心中にも住む」）の前に立ち尽くすものに対して。「このあがきこそ、『存在』を求めるあがきではないのか」「私は救いを求める道――それは即ち、『存在そのもの』という「他者」を求める道――に立つ自分を見出していた」*19

この「他者」について、後に『幸福のリアリズム』（1980）で犬養はこう書いている。

「（こう考えてみれば、人間は、いかなる人も、人間存在であるというその一事において、すでに宗教的な存在なのだ。）それは『外からの』『より大なる他者（真理とか善とか）からの』救いを待ち、その救いと出会うのを待つ存在なのだ。不完全で、欠如を内に抱く存在はただ、完全で欠如を内に抱かぬ存在によってのみ、満たされ救われる。そのような存在を、神と一応われわれのことばで名づける」

「そして、そのような精神存在を仰ぎ見て、そこから、より真なる、より善なる光を、わが精神のうち深くに受けたいと望む、それをこそ、祈りと呼ぶ」*20

「在る者をさがしているの。『存在』を」一家で疎開相談に訪れた小田原で出会った旧知の有島一家令嬢暁子に「あなた、今、何をしてらっしゃるの」と聞かれた時、なぜ自分がそう答えたかよく分からない、と犬養は書く。「道子さん、それが神を求める、ということなのよ。あなた、いつか私と一緒に...教会に行ってみたら？」と暁子。

戦局が日増しに厳しくなるある日、東京に戻った犬養が暁子に伴われて教会へ行く日が訪れる。迎えたドイツ人宣教師ホイヴェルス神父の「なぜ教会に来ましたか」の問いに犬養は答える。「生きることが分かるために...生きる意味がわからないから...」。神父は言う。「父よ、天にいます父よ、われらの父よ、あなたがいらっしゃるならあなたを私にお示しく下さいとお祈りなさい。それから、人のために、どんな小さなことでもとくにいやな仕事を心から喜んでなさい。わかって来ます」。しばらくののち、神父は犬養に上智学院ロゲンドルフ教授のところへ行って、「存在」ということ、教理をならうようすすめる。

「在ること、在る者、偶有、実在、生死、苦...ああ、『他者』はいた！その絶対者はまた、犯された人間行為を贖う者、であった！われわれはそこに参加してゆく...存在に、贖罪に」。三ヶ月目のある日、ついに彼女は神父に洗礼を求めた。

『ある歴史の娘』の抜粋を自選集に収録した際、犬養は自らのこの決定的出会い

を“テーマにした”最終章を含めなかった。その理由は「所詮、人間の魂の遍歴は、ただかき三十枚の原稿用紙の上に書くべきものではない」から、と自選集解説に書いた。^{*21}

犬養はその後の文筆活動を通して、冊数二桁に及ぶ「信仰」「聖書」に関する著作を上梓することになる。とはいえ、すでに 1958 年に文筆家として注目を集めるデビューを飾りながら、彼女が、このテーマに本腰を入れて取り組み始めるまでには、まだ少しの時間を要したのだ。

2、「西洋」との出会い

犬養の「聖書」「キリスト教信仰」をめぐる著述活動、その全期間にわたる展開をたどるにあたって、その最も初期に綴られた、短くも注目すべきエッセイをここで取り上げたい。「カトリシズムと私」と題されている。^{*22} その末尾の近く、犬養は書いた。「カトリシズムはキリストである」。これは彼女の信仰の核心を表した一行であろう。

キリストとの出会い。彼女の自伝的二巻では、「偶有を超えた絶対的存在」との出会いについて語る。聖書との出会いについても示された。しかし、そこではあえて「キリストとの出会い」と語ろうとしなかった。しかし、後年の直接に信仰的な多くの著述に先立つ短いエッセイのこの一行には、彼女のどのような信念が込められていただろう。

原版で 3 ページ弱のエッセイの流れを示す。

「私にとって」、カトリシズムとは「普遍性」そのものであった。

それは不思議にも「在野の精神」を教えてくれた。

それは倦まずたゆまず「生を愛する」勇気を与え続ける。気晴らしや、騒々しさ、恐怖からの逃避などでまぎらわさなければならないほどに「生を愛する」ことがむずかしくなったこの時代に。

「十字架」とはまさにそれを意味する。「生を愛する」とは自由な意思で、みずから逃避しないことを選択し、いかなる圧力のもとにあってもみずからの良心の告げる声にそむかないこと。他人もまた当然、この神聖な権利を持つことを認めること。

学生時代、自分は理詰めにして行って納得しなければ満足できない性質だった。そして「何のために生きるか」という課題、つまり「存在」の問題にぶつかっていた。それはまた自分の中にある悪への強い傾向に気づいた時でもあった。虚偽、いわれのない憎しみ、利己…。それらが私とカトリシズムとの出会いのきっかけになった。それは理、情、意を満たして余りあった。そして「カトリシズムとはキ

リストである」と続くのだ。

以上、まさに犬養の魂のクレドとも呼べよう。ここにはのちに彼女がみずからに託されたと信じ、展開することになる「神のことば」の種が、一つ一つ埋め込まれているかのごとき重みを持った内容である。私たちは本稿で、このあと一度ならず、これらことばに立ち戻ることになるだろう。

だがしかし、彼女のキャリアのこの後すぐの時期に、彼女がこの「ことば」の展開に取り組むことはなかった。それはまだ彼女が、「信徒使徒」としての「召し」を十分に示されてはいなかったからだ、と言えよう。

彼女は自らの前に現れた欧米社会・文明に魅了された。それは祝福の歴史を刻印された世界であるように彼女の目に映った。犬養はそこに人間本位の共同体のビジョンを見たのだ。戦後日本社会に対する辛辣なクリティークとして、文筆活動の展開する原動力を得たのだ。

1944 年終戦直前の受洗のあと、1970 年代中期を節目に、犬養がキリスト信徒文筆家として、自覚的、精力的な活動を開始するまでの筋道を辿ろう。

1948 年秋、一般日本人にとって海外への渡航がまだまだ夢のような体験であった時代、一般的日本人とは決していえぬ出自の恩恵にあずかって（と一般日本人である筆者は書きたくなる）犬養は留学を目的に欧米渡航を果たす。のちに処女作『お嬢さん放浪記』としてその体験を出版し、文筆家として頭角を現す道を準備する渡航である。

その洋行の決断の理由について、この書物を収録した自選集の解説に書いている。

自分のアメリカ・ヨーロッパ留学には「実は気恥ずかしくて文字にも口にもとうていあらわせないひとつの気負いが裏打ちされていた」。「あの愚劣な戦争をどういうわけにか生きのびた自分に、当然課された」と、ひとり思い込んでいた使命の達成のためだった。日本がああ偏狭で頑迷なナショナリズムに二度と戻ることなく、人類社会の公平で公正な一員に育つのを助ける使命である。五・一五事件を経験した自分を満たしていた、今思うと実に「かわいらしい」念願であるが、実はその起源は、五・一五とは一見何のえにしもない、自らの少女時代を飾った白樺派理想主義にあったのだ、と。^{*23}

国々を、民族を引き裂き破滅的な道を歩ませる人間の愚を乗り越え、人々に和をもたらす「普遍的な人間」の夢、人間の「普遍的な夢」の追求である。

そして彼女の決定的な出会いの一つ、西洋（欧米）文明、社会との出会いを果たすのだ。そこではかけがえのない一人ひとりの人間が、自分に与えられた自由と

責任を引き受ける、そのような価値観、歴史の重みに裏打ちされた価値観が根を下ろしているように見えた。それは黒船による開国の後、近代化の大義の名のもとに人間を抑圧する社会を再構築した祖国が、真に人間らしい共同体を生み出すために必要な力強いインスピレーションを与えてくれる世界に思えた。

処女作『お嬢さん放浪記』には、その後 1957 年まで足掛け 10 年に及ぶ欧米滞在を通して、祖国を戦争で打ち破った民族（米国、ヨーロッパ）の市民たちが母国でどんな風に暮らしているか、そのど真ん中に放り込まれた犬養が、まるで水を得たサカナのように、自分の本来の居場所を見つけたかのように、どれほど生き生きと体験してゆくか、その様子が余すところなく語られている。読者は、そこに綴られてゆく体験談の中に、さりげなく、しかし紛うことない形で示される彼女の信仰を目にする。ここで犬養は自らのキリスト教信徒としての背景を隠すことはない。しかしその一方で、まだここでは、信仰が彼女の執筆目的、中心テーマと見なされているわけではなかった。

と同時に、その欧米生活の中で、聖書をライフワークとする彼女の思いが着実に育ち始めるのを、私たちは犬養の回想の中にたどることができる。

「はじめて新約聖書を、祖父ののこした書庫の薄暗い一角で手にとり…胸を衝かれ」て以来、読解の困難な問題にぶつかりつつも、彼女は聖書に浸り始めた。1945 年ごろから黙想書に親しみはじめる。戦後早々には上智大学でホイヴェルス教授とロゲンドルフ教授の講座を受ける。^{*24} そのロゲンドルフから、「しっかりした信徒訓練」を受けるため、オランダのカトリック信徒センター「グレイル」に行くこと勧められる。やがて、アメリカでの試練の後、ようやく目的の場所に辿り着いた彼女は、そこで初めて本格的な聖書理解の学びを受ける機会を得る。1952 年、グレイルの旧約講義でユトレヒト大のパーター・ウルフと出会う。その結果、洗礼を受けてからもなかなか「日常に入ってこなかった」旧約に対して開眼を経験する。^{*25} 自分の「ホビーが一変した」と犬養はそのインパクトを書きあらわしている。^{*26} それは「ヴァチカン第二公会議に入る直前のころ、『神の生ける言葉・すなわち旧・新約聖書』を、もう一度、信ずる人々の毎日の生活の中心に置こうとする精神運動の生き生きと台頭しはじめた時期」でもあったのだ、と彼女は回想する。^{*25}

その後グレイルから送られたパリ・カトリック大学での二年半の学びでは、聖書は「内面的生活のためのもの、そのために学問的解説の土台の不可欠なことを身を以て知らされ、回覧風のメモノート」を作り始める。そして「1959 年のパレスチ

ナ第一回旅行のころから、一生の仕事として新約を生き生きと...世に問うてみたいと言う気持ちに熟した」*24

このように、彼女をカトリック信仰に導いたのはまず「新約」であり、受洗へと導かれてゆく歩みの中でも、当初「旧約」は読み難く敬遠し続けたこと、しかしやがてその旧約への理解も飛躍的に深まり、彼女が『旧約聖書物語』『新約聖書物語』二冊の執筆の構想を持ったのは同じ時期（1959、パレスチナ訪問のころ）であったことが著者の筆の跡から読み取れる。

そのような犬養であるが、正面から聖書を取り扱った最初の著書『旧約聖書物語』（旧版）に取り組んだ時、自分にとり旧約は「ホビー」であると語っていたのだ。また日本人にとり旧約理解の必要性は、国際理解、異文化理解のための手段であり、実用主義であるともあとがきで述べている。

犬養の前期の代表的書物のひとつ『私のヨーロッパ』（1972）は、ヨーロッパ生活を通して、清冽かつ痛烈に体験したヨーロッパ文明・社会・生活について、その土台・土壌となっているキリスト教伝統について、それまでの日本人ヨーロッパ文明解釈者にはものにできなかった深み、鋭さをもった理解に彼女が到達していることを如実にする一冊である。*27（会田雄次をして「専門家の名のもとに誤解をふりまいてきた私たち多くのものが冷汗三斗の思い」を味わうと言わしめた。*28）その一方で、ここにおいても著述の目的、関心の中心にあるのは、現代日本人にとって真のヨーロッパ理解であり、ヨーロッパの形成にあってキリスト教が果たした重要な役割は注目に値するという形をとるのだ。キリスト教信仰ではなく、ヨーロッパ理解が中心課題に据えられている。

しかし『新約聖書物語』を書き上げた時の犬養は、そのあとがきに、前述のごとく「この一書こそは『生けるしるしあり』とも言えるほどに心をこめて書いた。これを書くために生きてきた」とまで記したのだ。

このように著者が『旧約聖書物語』（旧版）、『新約聖書物語』二冊の執筆に当ってこめた二つの思いの間には、実は大きな質的転換があったことを私たちは見てとるのだ。

上の二つの著書完成時期の間に犬養が信徒・文筆家として何を経験したかを探りたい。

3、西洋の「母」との出会い

犬養は『こころの座標軸』に収録されたエッセイ（2005年11月付）の中で、聖書と歩んだ日々のうちにも「信仰に疑問を抱いた時期もありました」と言明している。*29 また『生ける石・信徒神学』を収録した自選集6の解説で、受洗後「い

つとき教会を離れたくらい日々」があったこと（そしてその時にすら、十九世紀末英国枢機卿ヘンリー・ニューマンの言葉「信徒が教会をつくる。教会とは信徒である」が自分から消え去ることはなかったこと）を述懐している。^{*30}

先に述べた犬養の執筆史に照らし合わせて、この彼女の「信仰」「教会」から遠のきがちとなった時期、危機の時期とは、1940年代中期の受洗のあと、1970年代中期に『新約聖書物語』を完成する間の、一つの時期であることが推測できる。この期間は犬養の魂の遍歴の中で、どんな期間であったのか？

犬養は前述自選集解説に書く。彼女が「信徒とは何でありいかにあるべきか」に初めて触れたグレイルやパリのカトリク大学の日々（1952～56）から二十年後（ということは1970年代前半）一冊の分厚い書籍が彼女の手元に届いた。コンガールの『信徒神学概要』である。恩師コンガールについて犬養は書く。「生涯をプロテスタンティズムとの対話・出会いにささげつくし...プロテスタントのつねにかかげた『教会は信徒である』の信条の中に、初期教会このかたのカトリシズムの教えの本質のひとつ—最重要なひとつ—を見てとつ」た人、「めざましい教会刷新のヴァチカン第二公会議においての神学・エキュメニズム部門の立役者・コンガール」と。^{*31}

この時期に彼女の信徒としての、また文筆家としての自己理解、使命感の飛躍があった。その飛躍を導いたのは恩師コンガールに学んだ信徒神学、そしてその背景にあるヨハネ二十三世に導かれたヴァチカン第二公会議が打ち出したカトリク教会の刷新（アジョルナメント）だったのである。

犬養自らの著述の中で、このヴァチカン第二公会議に結実を見る「合同運動」（エキュメニズム）へのいち早い言及が見つかるのは上述『私のヨーロッパ』（1972）である。そこでパリの「ヨーロッパらしさ」を語る中で「最近ローマで数年がかりに開催された、ヴァチカン公会議の、いわば口火を切った町であった」「新教とカトリックとの提携合同運動...現代の社会テンポと現代人の思考傾向に適する信仰生活上の新しい規程の数々なぞは、ヴァチカン公会議の始まるとつくの昔に、すでにパリで生まれていたものであった」^{*32}と書いた。どちらかというパリ先進性、中心性を訴えることを目的とした一節である。

しかしやがて、その後の『新約聖書物語』（1976）には、（公会議が體現した）「合同運動」こそは最後の晩餐におけるイエスの祈り（ヨハネ福音書）の実現であるとの一行が見つかる。その「あとがき」においては、1975年にフランスで出た聖書「共通普遍版」などにふれ、真の合同運動を目指して、という思いが短く添えられている。1977年末に出た「旧約聖書物語（増訂版）」の「あとが

き」ではさらに力をこめ、合同運動による聖書学の飛躍、その原動力となったヴァチカン第二公会議について、そして妥協ではない真の合同の切実性について語る犬養を見つける。

この時期こそ犬養が信徒神学と出会い、彼女の中でヴァチカン第二公会議のもつ決定的な意味の理解が確立されていく時期だったことが読み取れる。

そしていよいよ 1981 年刊『聖書の天地』では、その序においてヴァチカン第二公会議が訪れた歴史的経緯について、犬養はこう書く。

中世を通して「いつのまにか『組織』の面のみ強調されてゆき、『組織』ゆえの序列やそれにもとづく価値観教会観すらあらわれて来た」。その一方で民間には、数多くの真の福音を生き聖書の民としての生活によって社会をうるおす人々があらわれ続け、「福音的共同体の生命を救いつづけて今日まで永らえさせたのは、有名無名のそうした人々」であった。やがてルッター・カルヴィン等の宗教革命を誘うまでにも及んだのだ、と。

「そして一九六二―一九六五年。みたび決定的な出来ごとがカトリック教会内に起こった。ヴァチカン第二公会議がそれであり、以来、教会は福音の伝統に立ち返り、宗教革命によって別れて行った兄弟たちの諸教会との和解の一步に大きく踏み出した」のだ。^{*33}

本書巻末に近い「聖書と現代問題」の章に書く。「各時代は、巨大にして一度には到底把握し切れぬ聖書の天地を、各時代に即したある特定のひとつの角度からとらえようとしつづけた」。初期教会のころ、中世初頭において、宗教革命の時代。そして、日本では小さなニュースとして報道されたに過ぎないが、世界ではルッターの宗教革命以後最大の宗教・思想・文化上の出来ごととしてトップで扱われたヴァチカン第二公会議の「最大のがらは、まず第一、聖書の大天地を原点のメッセージによってとらえると言う『初期』に立ち戻り、『キリストとわれ、われと他者もろもろのパーソナル・コンタクト（出会い）』を持つ人々の集まりとして教会を解した点にある。第二には、そのために『キリストに聞く、他者もろもろに耳をかたむける』開放。第三には、神の生ける言葉（ヨハネ福音）であるキリストの言葉を聖書を通して日々味わいつつ、味わい聞いたその言葉を、『いま、ここで』実行に移すというダイナミズムに、立ち帰ろうと決意したこと。第四は、『キリスト教徒と称しつつキリストの心を忘れて、過去多くのあやまちをわれわれは犯した』と、教皇ヨハネス二十三世が、公言したこと」。^{*34} そして、このとき二つの相反する現象、「動揺」と「めざめ」が起こった、と。

犬養は、その「めざめ」た人々とともに歩み出したのだ。

犬養は限りある一人ひとりの人間を越えた「普遍」を求めた。うつろわぬ「真理」、「絶対」を、神を。そのもとにあるまことの自分を。生の謎の答えを。そしてイエスに出会った。聖書を通して。

犬養を直接受洗へと導いたのはカトリック教会、そのドイツ人神父だった。しかし聖書を通したイエスとの出会いには、「プロテスタント的」であると人が呼びたくなる側面もあった。犬養の原点には聖書があった。魂の苦しみの遍歴の中、聖書を通して、イエス・キリストと出会った。犬養にとって、これこそが普遍的（カトリック）経験だったのだ。*35

「カトリック教会」はローマ帝国の国教と定められた頃から政教一致の弊害に脅かされながら歩み続けてきた。やがて（神の摂理によってと言うべくして）起きた宗教改革の後には、良くも悪くもその影響の下に道を歩んできた。その過程で（人間的な）時代の塵を身のまわりに蓄えることにもなった。地上に生きる人間の教会であることに由来する塵である。二十世紀中葉、よりよく神とキリストに仕える教会として、源泉に戻って自らを刷新する時が訪れた。宗教改革後の「カトリック教会」が、身にまとわりつく塵を払う時が訪れた。

4、ヴァチカン第二公会議と信徒神学

初期エッセイ「カトリシズムと私」で犬養は、カトリシズムは私に「在野の精神」を教えてくれた、と書いた。一般的な見方に従えば、カトリック教会のカトリック教会たる所以は、ハイアラキイ・教導職に特別の意義を認め、特別な地位を与える面にあるように思える。上の犬養のことばは、その一般理解に真っ向から対立するように響く。ヴァチカン第二公会議的なカトリック教会観とはいかなるものなのか。彼女が「教会とは信徒である」という“真の教会”の姿を世に問うたのは『生ける石、信徒神学』（1984）によってだった。

そして、そこに至る道に、コンガールの信徒神学との出会いがあった。犬養にとって信徒神学とは？それは教会論の刷新、普遍的（カトリック）な「教会論」の確立を意味した。

そしてそれに基づく「教会」の姿を日本の信徒に問うべく、『生ける石、信徒神学』（1984）は書かれたのだ。

『生ける石：信徒神学』の巻末近く、信徒犬養に対して他の信徒たちから投げかけられた質問の大変興味深いリストがしたためられている。これらの質問は回心後の犬養がぶつかったカトリック教会の「現実」を、犬養の観点から痛々しく語っているだろう。抜粋する。

「信徒が教会？信徒も教会？危ないです、そんな考えは！」

「信徒ひとりひとりが、直接、パーソナルに聖霊を頂く？そんな考えはプロテスタンティズムですよ！」

「信徒が、ハイアラキイとはべつの、違うミニステリウムを持つ？冗談ではない。信徒のつとめは、ハイアラキイにしたがい、その司牧の対象となり、司祭召命の増えることを祈るだけです」

「信徒が、ハイアラキイに対してリーダーシップを取る領域があるですって、まさか！」

「結婚も、聖化への道？結婚が、ですか？」

「神父さまやシスターがちゃんといらっしゃるのに...あまつさえ、世間と一緒にあって軍縮だの、飢餓問題だの——コミュニストの言うことじゃありませんか。

（それが信徒使徒職の中に入っているって？いいえ、）信徒のつとめは、隣人に愛の手をさしのべればいいんです」

「仏教徒にも回教徒にも、キリストの救いがさし出されている？とんでもない。...あなたは異端よ！」

「プロテスタントやオーソドックスの教会も、キリストの教会ですって？」

等等。*36

しかし犬養の心には種が植えつけられていた。そして、その同じ種は、さらに時早く、^{カトリック}普遍教会の歩むべき道を求める多くのものの心に、植えつけられていたのだ。

犬養の問題意識は、「いまのままでは、キリストのからだは屍とされかねない」とのシュアール枢機卿の1947年の言葉*37にそのまま表されていた。

そしてヴァチカン第二公会議を実現へと導いた教皇ヨハネ二十三世は、次のように言いあらわしている。「（ハイアラキイの）教会は、変化し続ける社会一般——大衆社会——に対し、もはや語りかける言葉を持たない」「もはや教会は社会・世界に対して不在であるかのごとくである」「われわれはこの地上に、考古博物館の守衛として存在しているのではない。われわれはここに、生命つねに満ち溢れる園を未来に向けて耕し育てるべく生きている」*38

教会の「屍」化とは何か？その原因は何だったのか？犬養はこの教会の後退の起源を、宗教改革の時代にまでさかのぼって追う。

その重要な局面を「トリデンティニズム」と犬養は呼ぶ。（十六世紀のトレント公会議の影響下に生まれた）トリデンティニズムとは、宗教改革への過剰反応だったと見ることができよう。

宗教改革には功罪があった。犬養は一貫して、ルッターが教会史の中で果たした肯定的な役割を正しく評価しようとしてきた。

教会の和解、カトリックとプロテスタントとの和解ためには、宗教改革の功罪を正しく理解することが必須となる。ネガティブ・アプローチ（相手が主張することだから、誤りであるという態度）からの解放が必要である。

犬養はその解放の試みに挑む。犬養は読者のために、カトリックとプロテスタントの一致点、不一致点を包括的にまとめて見せた。プロテスタントとカトリックは、重要な部分で多くを共有しているのだ。トレント公会議はそれらを見無視し、相違点のみをことさら強調した。一方、信徒は教会の原点を正しく見つめなければならない。一覧から要点を採録しよう。

① プロテスタントの正しさ（一致点、トレントが触れなかった点）

教会とは：信仰者全員のコミュニティ。聖霊（恵み）をいただく信仰の（神の）民、全員が教会。全員がキリストのからだをなし、普遍的司祭、王職。

コミュニティの核としてのミニステリウム（牧師）。

救いは信仰による。

洗礼、聖餐。

全員は（信徒も牧師も）同一の聖化に同様に招かれている。

信仰の基礎はみことば（聖書）。各自が聖霊の導きにより、みことばから光を受ける。

信徒使徒職。自主的な「神の子の自由」による使徒職。

② プロテスタントが否定した使徒承伝、逸脱

ハイアラキイの否定。

秘蹟の解釈。記念であり、犠牲ではない。

みことば（聖書）のみ基礎とし、使徒承伝を認めない。*39

犬養にとり、二十世紀に起きたこと（ヴァチカン第二公会議に結実する流れ）は源泉、初代教会への立ち返りでもあるのだ。これは十六世紀宗教改革が理想として掲げたことでもあったはずだ。それだけでなくカトリック側の反宗教改革もが共通して、理想に掲げたことであったはずだ。教会の起源はキリストご自身であり、教会（エクレシア）の意味は主の聖霊によりともに呼ばれた（コンヴォッカチオ）神の民であり、主に遣わされたもの（アポステレイ）はみな使徒（普遍的使徒）なのである。地上のキリストから直接教えを受けた弟子たちの世代では、ハイアラキイ（中核の使徒）と信徒（その周辺の弟子たち）は、キリストをかしら

とする肢体のそれぞれの部分として、はるかに一体化していた。

一つの肢体は違う役割を担う部分からなる。“信徒”にも代表的な二つの異なる役割がある。それはキリストご自身が（完全な）人間であり、また神の御子、神と対等なものであるという二重性に依っていることにも由来している。生み育てる教会（サクラメントウム）と、生き育つ教会（レス）の二つ、教会のために仕える使徒（ハイアラキイ）と万人万象のために仕える使徒（信徒使徒）の二つである。

二つの関係は上下関係でも、主従関係でもない。一つの肢体の、異なる役割を担う二つの大切な部分である。

しかし、中世から近世へといたる歴史（十三世紀以降とりわけ十六世紀ごろの）、政教一致の社会の出現の中で、「教会法に（のみ）による物の見方」、司祭・司祭を中心とする発想法が支配するようになった。そしてカトリク教会はハイアラキイ（法的組織）のみが教会であるとの（トリデンティニズム的）ふるまいに陥り、その反動として、プロテスタントはハイアラキイを否定するに及んでしまったのだ。

このようにエキュメニズム神学と信徒神学は車の両輪なのだ。

そして、にもかかわらずなぜ分裂が起きたか、犬養はその歴史的原因も心に留めておこうする。

もともとカトリク内の心ある司祭、司教、信徒の「見ていたもの、改革にぜひとも必要なもの」と、同じものの少なくとも半分を、ルッターも「見ていた」。

ルッターがまず何より目指した改革は、草の根の信徒男女、司祭たちの中から、十二世紀以来、切望されていた「生き方」の面での教会改革だったはずだ。（ルッターの言う「善業」とは「贖宥」、「土地の寄進」等である。）

しかし、彼自身の内面の問題をも、客観・普遍の信仰の真理の次元に持ち込んだ。

彼個人の不安なる魂の問題がからみつき、カトリク教会組織者たちとのゆきちがいが、彼に「追いつめられた心理状態」を与え、「生き方」を越えた「骨組み」そのものへの攻撃にまで及んでしまった。

ツウエングリなどへの妥協（聖体の問題など）もあった。またプロテスタントが、ほんの束の間に、いくつもの派にばらばらに別れたことがカトリシズムとの対話を困難にした。政教一致時代が崩れ落ちるなか、各国競い合うナショナリズムの時代、諸国の政治的思惑がありすぎた。トレント公会議（一期）は反論のみに心を奪われることになった。しかし二期にはカトリク内改革に取り組まれるように

なった。

プロテスタントは確かに、トレント公会議にカトリク内改革運動がなし得なかったものを果たさせる力になったのだ。

しかし、その時代に力を得た「トリデンティニズム」は部分を総合の中でとらえず、そのシステムだけを「至上・中心」とした。聖職者主義に陥った。新しい世界を拒んだ人々は、自分たちの「教会」以外に救いなし、という立場に凝り固まったまま年月を過ごすことになった。^{*40}

二十世紀中葉まで、カトリク信徒が「自由」に聖書を手に取り、みことばに思いをめぐらす黙想が危険視されたのは、プロテスタントへの反動と護教が原因だったと言えるだろう。

そして十九世紀から二十世紀にいたる流れの中で、ヨーロッパにおいてさえ「キリストはよいが教会はごめんだ」という社会が生まれるに及び、教会、「神の民」はある意味「ゼロからの出発」、初代教会と同じ状況の中で再出発を求める心を与えられたのだ。

刷新は、教会の命への立ち返りは、トリデンティニズムへの挑戦だった。プロテスタントの正しさをカトリクに取り戻す試みが信徒神学だった。真のカトリシテイ、心貧しきカトリクへの回帰である。

「聖霊はいつもはたらかれ、二十世紀という、それまでの社会構造と発想法が轟音を立てて崩れ去り、巨大な大衆社会、技術時代到来と共に、失地回復への道を、その火急の必要の認識もろとも、多くの人々の心中に開かれ、置かれた」。それは「大衆のただ中に『散らばる教会』つまり信徒の、位置と役割の再発見だった」^{*41}

犬養は宣言する。「信徒は、セクラのただ中での教会である」と。^{*42} 信徒神学は「初期教会時代にははっきりとスポットをあてられていたにもかかわらず、中世特に中世後期から、つい四、五十年前まで、いわば日陰者のように扱われ」後退させられてきた。その信徒神学がいま「教会神学の一大総合」、「クリストロギイ」の中に取り戻されたのである。

犬養は書く。メルシュやコンガールやド・リュバックは「新しい、モダンな子ども」を事新しく訴えたのではなく、聖書伝統と使徒承伝の源泉に正しく戻ったのだ。それは教会神学の再生であり、再生の源はキリスト御自身であり、聖霊御自身だったのだ、と。「教会自身はいったい何であるか」を、聖書そのものに立ち戻って謙虚に問い直した尊い公会議、ヴァチカン第二公会議実現への道はこのようにして整えられたのだ。そして第二公会議は、教会を「生きて歩む」存在に

帰り戻って（「法的存在」をはるかに越えて）把握しなおし、それによって、本来キリストが与えた十全な姿を取り戻そうと試みた。その時、生まれるべくして、「分裂したキリストのからだ」（カトリック・プロテスタント・オーソドックスの分裂）をどんな困難があっても「主が最後の晩餐の席上であれほどにも望まれた、一致と和解・和合の方向に向けたい」という心からの願いが生まれ、ついに新しい一歩が踏み出されたのだ。^{*43} すべての信徒にとって「唯一の神、ひとりの主、ひとつの洗礼」（エフェソ 4：5-6）ではなかったのか。

このようにして犬養は、コンガールの信徒神学、ヴァチカン第二公会議との出会いによって、みずからの信徒使徒としてのヴォッカチオに向き合わされることにもなった。

神の創造されたセクラ（時間、歴史、世代、世）にはそのもの自体に価値がある。その被造の世界のただ中で、その世界を秩序^オ付けるのが神の民としての「信徒」の使命である。^{*44} キリストが人間の条件に入られたように、（ハイアラキイではなくレスとしての）信徒使徒は、地上において「神の国」を育てるイーストとなる。キリストが司祭、預言者、王職を完成者として担ったように、キリストに遣わされた（在野の）信徒も、信徒司祭職、信徒預言者職、信徒王職をにやう。文筆家としての道を示され歩んできた犬養が、自らのヴォッカチオである信徒使徒職を「信徒預言者」のそれであると自覚したであろうことは見るに難くなかろう。クリスチャン文筆家として犬養の確立である。

5、イヌカイの福音書

このような導きを経て、犬養は聖書を中心に据えた執筆活動を信念をもって開始していったのだ。まず『新約聖書物語』（1976）が上梓され、続く『聖書の天地』（1981）、『聖書のことば』（1986）を含め、これら著述は、まさにクリスチャン文筆家犬養の自己確立宣言とも呼ぶべきものとなっていよう。それまで内に秘めていても、あえて前面に出すことはなかった自らの原点、土台である信仰の、その宣言を自分の文筆家としての一番の使命とみなし、取り組み始めたのだ。

いま“クリスチャン文筆家”と書いた。犬養の“カトリック”としての自覚はゆるぎないものであるが、ここではそれは前面に出されない。プロテスタントであろうが、他の教派であろうが、キリストの^{エクレシア}教会にあるものなら、だれもが高くかかげる共通の信仰、根源的な意味で^{カトリック}普遍的な信仰の形を見つめ、そのありのままの姿を、ゆるぎない姿を、現代人の前に示したいという強い思いに突き動かされて、彼女がこれらを書き進めたことが伝わる。

その新しい歩みの幕を切って落とした『新約聖書物語』は、「イヌカイの福音

書」の呼び名を冠したくなる一冊となった。

新約聖書に忠実にもとづいて、イエスの地上の生涯、イエスとはだれであったかを描き上げる。そのことばとわざに託されたメッセージを求める。イエスこそは待たれていた、まことの救い主であった、というメッセージである。

まず何より、各人一人ひとりがイエス・キリストと出会うために聖書がある。ここに幕を開ける彼女の自覚的カトリク文筆家としての著述すべてで、一貫して、守られつづけられることになる基本線である。1960年代初期「カトリシズムと私」を書き上げた心の柱としてすでにそこにあった。その後、ものかげで息をひそめていた信仰の灯を、燭台の上にかかげて家中に輝かせようとする活動が、いまや開始されたのだ。

聖書を通してキリストと出会った犬養。読者が聖書のことばを通してキリストと出会うその手助けを、自分の著述活動によって行うことを信徒使徒として自らの使命と捉えたのだ。そのような著者の最初の書物が『新約聖書物語』になったのは、まさしくなるべくしてなったと言えよう。犬養のように聖書にのぞむものにとって全聖書の中核は、言うまでもなく福音書であるからだ。福音書は愛の神によって世に送られたその御子の生涯、そのことばとわざ、その意味を伝える。

犬養が自らの著述活動を促される背後には、現代人が聖書を読むにはよい手引きが必要である、というすぐれて批判的な知性が臨在する。現代の読者が四福音書正しく理解しようとする時、さまざまな障害が存在している事実への洞察。ここにクリスチャン著述家犬養を犬養にするもう一つの大切な側面が明らかになる。

犬養の信仰者としての成長、聖書とともに歩む日々の中で、御霊に教えられ、学び続けてきた“真実”があった。聖書を通してイエスに出会おうとする時、そのさまざまな障害、一面的な読み方の誘惑がつねに付きまとっているのだ。

現代人、一般読者が四福音書を読むとき、一見理解不能な叙述に遭遇することがままある。時には叙述の“くい違い”“齟齬”がある。聖書は矛盾だらけで、一貫した読み方などあり得ないように思えることがある。

他方、多くの信徒が時にするように新約聖書を「あるとき手にとって、パッと拓いて、偶然そこに出て来た一節を読み、人生に対する何らかの光を得ようとする」、その時そのだれかに理解できる意味を読み取りとればいい、というような読み方にも大きな限界がつきまとう。これでは聖書のことばに託された意味を、十分に理解したとは限らない。

二十世紀の日本に生きる聖書一般読者が、そして犬養自身が、二千年前に中東世界で書かれた聖書を正しく理解するには、そのための努力（理性的、科学的営

み)が必要である。

犬養はこの分厚い著書のあとがきで、その根拠を簡潔に四つにまとめてみせた。

第一、時や地方性を越える普遍性を持つ内容も時と特定地域の制約の中で語られたこと。

第二、記録者にまつわる理由。

第三、だれを読者にするかをはっきり頭において執筆された。読者層の特殊性。

第四、一見矛盾する文章をいかに総合付けるか、言外行外に含まれる意を（いかに旧約や当時の歴史状況などの考察にもとづきつつ）汲みとってゆくか。^{*45}

犬養は四福音書は、編年体のイエスの伝記ではないと主張する。

使徒たちはイエスの復活後、聖霊の訪れ後、初めて示され、振り返ってイエスがだれかを十全に理解した。そしてその理解をのべ伝えるため、新約聖書（福音書、書簡）を書いた。

言い換えると「イエスはいったいだれであったのか」「彼のたずさえたメッセージはいったい何であったのか」「彼の短い一生の意味は何であったのか」、それらを正確に生き生きと伝えるための取捨選択や一括が行われている。その結果が「大づかみの編年体の形」をとってあらわれでて来たのだ。^{*46}

新約聖書は、そのイエスによって設立された教会（その使徒たち）によって書かれた「彼はキリスト、メシアであった」ことを告げる書物である。そして四つの異なる福音書が書かれた。四つの福音書はイエスの本質、その救いの教えをそれぞれ一つの立場・角度からとらようとした。四福音書の違いは、“四人”の限られた性格と狙いに由来する。四つの福音書の書き方の違い（そして出来ごとの流れのくい違い）は、四者が、それぞれ自らが語ろうとしている特別の聴衆を念頭に置き、一番目的にかなった、一番適切な語り方を試みた結果である、と見なせる。

例えばマタイは過去、過去とイエスのつながりに重きを置く。マルコは現在、拡がり。ルカは今後、未来の地平。ヨハネ、一切の総合。^{*47} 犬養は本書に続くのちの著書でも、くり返し、この四つの異なる視点、書き方、その個性と相補性を、さらに深く説き示そうと試みている。

このような“批判的”な力に支えられた犬養の『新約聖書物語』をもう一つ特徴付けるのは、四つの福音書、すべての内容を総合して、実在したイエスの生涯のありのままの姿に迫ろうとする態度である。

イエスの三年間の生涯は厳然として実在した。その歴史的事実、真実のイエスこそが、彼がまことにだれであったかを知る基盤、土台である。

イエスの真実の生涯とその意味を知ろうとする試みは、知性、理性に反するものどころか、神が人間に与えたそれらの力を総動員する必要があるのだ。このような高い目標をもって、構想から十数年の期間を掛けて完成されたのが『新約聖書物語』だった。

イエスを知る。二千年前、肉を持って地上を生きた紛うことなき歴史的存在として。そのことばとわざ、そのもっとも正確な姿に「歴史的」に迫りたい。そのための私たちの手元にある最大の手がかりは、当然地上のイエスを直接知った弟子たちの残した四福音書である。その四つを最大の手がかりとして、地上のイエスの生涯、約三年の公生涯に迫ろうとした。

たとえ最終的な（完璧な）ジンテーゼに到達することは（現実的には）ありえないとしても、（“理論的”には）そのようなジンテーゼがありえると想像すること（イエスの生涯は厳然と実在したものであり、その約三年の歩み全体を知ろうとすることは、イエスと出会う、イエスとはだれであるかを真に理解する上で、大切な姿勢である。

イエスの生涯、イエスがいつ何をしようとしたか、さまざまなわざ、人々に話したこと、語ったたとえ話、すべてには、その時と場所に応じた特別の意味、意図があったはずだ。彼の生涯には必然的な流れ、展開があったはずだ。

マタイとマルコとルカとヨハネが試みたように、犬養も、自らのベストを尽くし、調べ、祈り求め、真実のイエスの生涯の姿、彼のメッセージに迫ろうとした。

そして、その一つの結果として、自らの『新約聖書物語』で、犬養はその生涯を編年体に近い形で再構成を試みるのだ。イエスの一つ一つの行い、言葉の意味はそのような中において、最も正しく把握し得るはずだ。

犬養は信じる。

待たれていた救い主の訪れ。しかし彼は（この世的な）民の多くが期待した救い主ではなかった。人々は彼がだれであるかを知らなかった。権威者たちは彼を憎んだ。だがイエスは、ことばとわざによって、自らがだれであることを示していった。まことの救い、真理である「命」をもたらす、愛の神の御子、キリストである。

犬養はイエスの公生涯を、いくつかの段階に分ける。あくまで便宜的なものであるが、全体像の中で一コマ一コマを捉える必要を意識する上では有効である。六期による区分、三期による区分、二つが試みられている。

それらの中で重要な節目となる出来ごとの一つは、ペテロの「あなたはメシア、生ける神の子」との告白である。その時、あまねく人々に自らを示し、神の国、

福音を語り告げる前半の日々から、教会の設立、使徒育成のために費やされる後半の日々へと移るのだ。

前出『幸福のリアリズム』(1980)の最終章で、犬養は自らの「キリスト教信仰」の中核について、こう語る。「たしかに意味を持つ生（私の生、また人間全体の生）の、その意味を示し明かし、そこに向かって歩む私に手をさしのべてくれるのが、イエス・キリストだという点である」。そして「彼と同時代を共に生きた人々の証言（それは二千年間、伝承されて今日に至っている。この証言が、キリストへの真の根拠をなすのである）と、彼自身ののこした言葉によって知ることが出来る、彼の生と死への態度の中に、『最終の意味への道』を見てとることが出来るとする確信である」

「では、キリストにおいてあらわされたと、他のキリスト者と共に私が確信する『神のしるし』は何であるかと言えば、彼が生きつつ、憎悪と悪の結集である苦を受けつつ、苦と悪の果実とも言える死を通りつつ、なお、彼が父と呼ぶ神と兄弟と呼ぶ人々——彼に苦を与える人々も含めるすべての人々——の方にだけ心を開きつくし自らを与えつくすことによって、苦をも死をも克服したこと。言いかえると救いの道を開いたこと」*48である。

このキリストに、犬養は「聖書」を通して出会った。

そして、犬養は自分の出会ったイエスを伝えるため、「彼女自身の福音書」を書き上げたのだ。

6、初めに終りを思う

「『元始（はじめ）に』の一語で幕をあげるドラマには、必ず、『終りには』の最終場面がつく。何も劇とは限らない、建築や工芸・美術や文学作品、その他その他の創造者は、元始を思う以前に、まず以て『どう終るか、完成するか』『そもそも何をつくりたいか』を考える。では。人類史はどうなのか」*49

これは、現時点で犬養の著書群の最末尾に位置する『歴史随想パッチワーク』（2008）、その巻末に収められた黙示録を扱った一篇の出だしである。実は彼女は執筆キャリア一番早い時期に属するエッセイ集『初めに終りを思う』の巻頭に収めた、表題エッセイ（1962年）でも、ほぼ同じ思いをすでに語っていた。自らの人生の物語の書き手として、年の初めに、一歩ずつ近づく人生の「終り」を思うことは「縁起の悪い」ことではない、と。*50 人すべては、「初め」から「終り」に向って歩んでいる。その歩みが「歴史」である。

犬養の信徒使徒としての使命感ういういしい『新約聖書物語』刊行の五年後（その間『旧約聖書物語（増訂版）』（1977）もものにしている）、彼女が聖書を主

題に、次に世に問うた第二巻が『聖書の天地』（1981）だった。犬養は一卷一卷執筆に十分な時間をかけることが見てとれる。

そんな本書の意図は、聖書の「木ではなく森を見ること」であると「序」とあとがきでくり返されている。鳥瞰図のごとくとらえる。一貫して流れるメッセージを大づかみに浮彫りにする。読者には聖書の木を見て森を見ない危険がつきまとうから、と述べられる。

また彼女は序で、信徒ではない一般読者に向け、「聖書について知る」ことと「聖書を知る」ことの違いの大切さについて語っている。そして聖書とは、とどのつまり「喜びと生のための書物」であると述べる。「聖書を知る」とは「より福なるものとの出会い」であり、「日々の創造」であり、「新しい歌を歌う」ことに他ならない、と。そう犬養はここでも、私たち一人ひとりが主イエスと出会うために聖書を読む、聖書がある、と語っているのだ。

そして全聖書各巻はたった一つのものをいろいろな方面から差し示す指であると述べられる。その差し示されたもの、聖書に含まれるすべての伝承の土台、はイエス・キリスト——その死と復活と昇天——なのだ。新約時代の使徒たちはその差し示された一つのものに出会い、そのとき彼らに伝えられてきた旧約聖書の本当の意味を、生ける理解を手に入れたのだ。

本書において犬養は新約聖書を越え、新約・旧約の全聖書を視野に入れる。新約・旧約の関係、全巻の流れを通して、聖書が伝えるメッセージの核心に迫ろうとする。それ自体“図書館”の呼び名もふさわしい、全聖書の多様な各巻はその核心の理解があって、各部が正しく理解できる。そしてその各部が全体を、核心を補強する。

その意味において、聖書を旧約第一ページから読むのは“誤り”である、とさえ犬養は述べるのだ。^{*51} また、パッと開いて目に飛びこんで来た文句を、それだけ前後とかかわりなく分かった気になったりすると、大きな勘違いをしているかもしれない理由でもある。森を見る必要。聖書を正しく読むため、よい手引きが必要になる理由の一つがここにあるのだ。

本書第一章で、犬養は聖書とは「まず歴史である」と述べる。本書のポイントは全聖書を、神の計画の中にある“歴史”と見ることであろう。そして、その木ではなく“森を見る”ことである。

タイトルに謳われた「聖書の天地」とは神のことばが創ったすべて、である。聖書を通して明らかにされる、人間の生きる世界、全宇宙の歴史という意味が込め

られていよう。天地のはじめから終わりまでを包み込む大絵巻。世に在るすべては、その中の道を前へ進んでいく。

そもそも人間にとって歴史とは何か？犬養は第一章で続ける。いくら時間を積み重ねても、出来ごとを寄せ集めても、それだけでは歴史にはならない。歴史の名に値するのは、人間が自らが持つ「自由」の力を行使した（方向を選んだ）結果生まれるものである。人間がその理性とともに、自らの判断で作ridすものである。言いかえれば、「人間」とは「歴史」を歩むもの、「歴史」を歩むものが「人間」である。そのような歴史には目的がある。目的を持つ歩みが歴史である。人間とは最終目的地・ゴールに向って歴史を歩む存在である。

私たち人間の生きる世界は、人間のような被造物を完全に超越した、絶対、完璧な存在の、限りなく奥深く、かつ完璧な意図にもとづいて生み出された、と信徒は信じる。完璧な善である造物主は、その善さのゆえに、被造物に啓示を与えた。人間が自分自身を完成させる道、造物主と一つになる道である。その啓示が納められ、書き留められたのが聖書なのだ。

聖書の歴史のユニークさは、人間の歴史を神と人間の関係の歴史と見ることである。神が人間に差し出した約束の歴史。キーワードは「約束」、新旧二つの約束。そして、約束とは、ゴールの約束である。

歴史とは展開されていくものである。歴史の目的、「約束」も同じである。それは少しずつ次第に明らかにされてゆくのだ。発明ではなく発見されるもの（啓示されるもの）である。と同時に、人間がその理性の力に頼んで、自ら受け入れ従うものである。^{*52}

かくして本書の各章では、神が人に与えた旧い約束（旧約）から新しい約束（新約）に向かう民の歩みが、聖書に記録された歩みが、段階を経てたどられる。神とはだれ？人間とは？神は人間に何を望んだのか。望んでいるのか。これらの問いについて、神が少しずつ民に明かしていゆく、その過程が聖書には示されているのだ。以下、旧約から新約へと至る歴史をたどる本書各章の要点を抽出しよう。

旧約聖書、創世記は、神による世界と人間の創造、第一の創造をもって始まる。神は人間を神の似姿に造った。神は自らのつくったすべてを善しとした。

神とは究極の善である。全聖書はその善をいろんな呼び方で呼ぶ。存在そのもの、愛、命、光、命を与える水、真理。

生きることは愛すること、愛することは創ること。愛するがゆえに、溢れ出す。これが創造。神は人を、すべてを、健やかさに向って呼んでいる。

ところが私たち人間は、自分たちの生きる天地に目をやる。そこには健やかさが溢れているか？どこを見ても命と祝福が溢れているか？否、まったく否！では、それはなぜなのか？世界の謎。生の究極の秘義。しかし聖書には、その謎の答えが与えられているのだ。

人間自身が自ら選んだ、その健やかさからの遠ざかりである。

創世記には神が、神の似姿である人に与えた「自由」の力による、人間の神からの遠ざかりが語り示されている。死や苦や悪の起源が語り示されている。アダムとエヴァの神のことばへの不従順の物語である。それらの「悪」は、神が人間のみに与えた自由を人間が誤用することにより、人間の歴史に入り込んだのだ。神は死はつくらなかった。悪はつくらなかった。つくったのは人自身である。これこそ創世記、失楽の物語の大きなメッセージである。（そしてまた、これはイエスが語った「放蕩息子」の物語の意味でもある、と犬養は教える。）

しかし善き神、愛により人間を創造した神は、すでにそのような人間に救いを用意していた。最初にあった健やかさへの立ち返りの道である。人間による遠ざかりの結果生じた創造の祝福の喪失に対して、神は人間の名で、人間の協力を得、人間とともにすべてを再創造（第二の創造）することを望んだ。その救いを人とともに準備するためのステップが旧約の民の歴史、アブラハムに始まる、神への応答の歴史だった。

モーセと過ぎ越し、民の王ダビデによる王国の樹立、民の背きによる王国の崩壊、民の離散、預言者によるメシアの預言。これらすべてが、来るべき“万人の救い主”、人となった神、キリスト・イエス到来の道を整えていったのだ。

そしてイエスの地上の三年の歩み、ことばとわざは、イエスがだれであるか、神の万人のための計画、神の愛を語り示している。

イエスの生涯、死と復活は、いと高きものからの啓示、新しい約束の啓示である。約束は、その約束を受けとる人間の信を要求する。

旧約の民にとって、神の約束は選ばれた民に与えられる嗣業の地の約束だった。

新約聖書において、人間の歴史のゴールとは万人のための「生」、「よろこび」である。そのゴールの約束が、神、“創造主”によって人間に、キリストを通して、ゆるぎなく差し出された。

そして、民は、この新しい約束をイエス・キリストによって与えられた時、その啓示を通して、旧約とその歴史の真の意味を理解したのだ。旧約は新約の前知らせ、準備だった。そのとき民は、旧約のことばの中に、イエス・キリストの新しい約束が浮かび上がるのを見たのだ。

聖書の核、クライマックスは新約聖書、キリストの福音であり、新約は旧約の完成、旧約の変容だった。聖書の語る歴史は、万人にもたらされる福音の歴史である。

こうして神の約束は、イエスにおいて、限られた民、限られた地域を越え、人間のもの、万人への生と喜びの約束、^{カトリック}普遍なものとして実現する。

今、新約の光の下に、旧約の歴史だけでなく、全人類の歴史の意味を理解することができるようになる。

「教会とはイエス・キリストの生命と言葉に与り、時のかなたにおいて成就される神の国めざして歩むすべての人々の集り」*53である。

イエス自身によって神の国は「育ちゆく樹木」に喩えられた。そして、一人ひとりの人間は葡萄の木に幹につながった一本一本の枝に喩えられた。日々、樹液である神のことば（聖書のことば）を受け、そのことばとともに生きることにより、そのことばをさらに深く理解し、命の糧として、見事な樹木へと育ってゆく。

このように本書『聖書の天地』は聖書を、「人と世界の歴史」の意味を解き明かし浮かび上がらせる書物として読み解く。キリストの信徒犬養による、一般読者のための“聖書神学”の試み、あるいは生きとし生けるものを包み込む^{ユニバーサルヒストリー}「普遍史」（近代化の歩み中で“実証主義者”たちが生み出した“新しい”時代の“普遍史”に対する、もう一つの普遍史）の企てである。聖書の中には、自ら神から遠ざかった人間のために、神ご自身がみことばを通して示された、「命の祝福」への立ち返りの道がしたためられている。人間はその導きの光に照らされながら、聖書の天地の中を、ゴールに向かって進んでゆく。

7、神のことばと“文字通り主義者”

犬養が『聖書の天地』を執筆した時期は、彼女が『生ける石、信徒神学』を構想し準備を始めている時期とも重なっていた。後者は1984年に出版された。それに続いて犬養が書き上げたのが『聖書のことば』（1986）だった。プロテスタンティズムを“聖書主義”と特徴づけるなら、本書は犬養の最もプロテスタント的な一冊と見なすこともできるだろう。

一方犬養にとり、真のカトリシズムにあって、聖書のことばは信徒一人ひとりのキリストとの歩みのため、欠くことのできない役割を与えられている。

ここに問われるのは真の聖書主義、普遍の聖書主義とは、となる。

こうして書き上げられたものは、犬養のキリストロギイにも相当する。それはカトリックであろうが、プロテスタントであろうが、すべての教会・信徒のために、「聖書を読む」「神のことばを聞く」とは、を示して見せる「基礎神学」を描出

する試みと見なすこともできよう。

犬養が本書執筆を思い立つきっかけになったのは、ある非信徒の友人のことば「聖書なんて作り話だね。『神は言った』なんてさ」だったという。^{*54}

彼女は、聖書を読むものが陥る「文字通り主義」の罟を見たのだ。

文字通り主義者の素朴すぎる思い込みとは、例えば「神は言った」と聖書が記すとき、神が人のように口で語ったと考えることである。と同時に、一部の「聖書のみ」の聖書原理主義者がするように、たとえば創世記に収められたような物語を一字一句文字通りの出来ごとがあったと考えるような例も含まれよう。そして、このような聖書原理主義者の聖書理解は、一般人に対し、聖書をより受け入れ難いものに見せてしまう。

ある意味この「一言一句を至上とする」「聖書主義」は、カトリクの使徒承伝尊重を否定して、「聖書のみ主義」に立とうとした宗教改革、プロテスタンティズムのカトリクに対する過剰反応の面を持っているのだ、と犬養は見る。著者がここで取り組もうとしているのは、もう一つの聖書の「現代化」と呼んで差支えないものであることに気づく。

「神が言った」というのは、神が口をきいた、ということではない。（このような“言語分析”にウィトゲンシュタイン的精神を感じるのは筆者だけだろうか？）その意味を正しく示して見せることは、真の（カトリクな）信仰を明らかにすることにも相当するのだ。「神が言う」「神のことばを聞く」とは、と問うのは、「イエスとはだれか」「聖書とは何か」（聖書を通して）「イエスと出会う」とは、と問うのと同じである。

ここでも犬養はまず原点に立つ。「聖書とは何なのか。旧き約束の書も、新しき約束の書も、全体としてまた個々の巻として...みな、たったひとつの核心をめぐる。...いうまでもなく、人間となって人間の条件に入った、みことばイエス・キリスト。創造者であるとともに、救済者であるキリスト」^{*55}

旧約では何百、何千回か「神は言った」と表現された。しかし、ある時その神のことばが生ける人となり、その彼が言葉と行動と生き方をもって語ったら？ことばを聞くとは、パーソナルな出会いになる。これこそが「福音」である。

ヘブライ書一章（1：1）は語る。

「神はかつて、多くのかたちで、多くのしかたで、民に語られた」。神は歴史を通して、時に応じて、いろいろな形で人に語りかけた。出来ごと、掟、預言、しるし...その時代と場所に応じて、神は民に手を差し伸べ続けた。この理解は犬養自

身の人生経験に根ざしているだろう。本書では、聖書に記された、上のような、時に応じたさまざまな語り方ひとつひとつにスポットライトが当てられていく。

そしてヘブライ書は上の言葉に続ける。しかし神は「この終りの時代には、御子によって語られた」（1:2）のだ。時がいたり、神のことばは人となり、人々の間に住み、そのことばとわざによって、人々に語った。

キリストこそは神のことばである、という真理。

福音書は犬養の原点であると述べた。そして四福音書の中でも、犬養が最も奥深く、その中に浸り続けたのがヨハネの福音書であったことは、彼女の著述のふしぶしに表れている。キリストを「神のことば」として思いをめぐらすのはヨハネ書である。キリストが神のことばである、とは？

犬養は本書で“ヨハネ”に与えられた啓示（ヨハネの福音書、書簡）に沈潜する。

犬養は本書で、繰り返し何度も何度も（10回以上）「ヨハネの福音書」第1章プロローグに立ち帰る。

初めに神のことばがあった。その「神のことば」が人となった。そして私たちの間に住まわれた。そして私たちに語りかけられた。

「神のことば」が人となった。なんという人間の思いをはるかに越えた、驚くべき主張。最奥義、福音。

「ヨハネ以外の福音史家たちは、イエス・キリストの言葉と行いを書こうとした。ヨハネは、神の言葉であるイエス・キリスト——イエスの最奥義——を書こうとした」*56

「神のことば」とは。「神のことば」が人となるとは。その「人」の語ったことばとは。そして「聖書のことば」とは。

本書の核とも言うべき第三部「みことばと息吹き」を中心に展開されたキリスト論を素描しよう。

キリストが世に残した教会とともに、犬養は、聖書の神は三位一体の神であることに信を置く。福音書の中でも、三位一体の神をその語りの中に浮かび上がらせ、描き切ろうとしたのがヨハネ書だった。三位一体とは、父と子と聖霊の三位一体である。

第一者、父は神。第二者、御子はことば。第三者、霊は愛。

父なる神は愛のことばを語る方である。そしてそのことばが人（御子イエス）となった。人となったことば、イエスは人々に、愛の霊を与えると言葉した。「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、

わたしが話したことをことごとく思い出させてくださる」(ヨハネ 14:26)

聖書は「神は言った」と語る。神がいろいろな形で人に語られたことが、聖書を通して書き留められている。しかし、それはいつも、常に、神の御子でありことばであるイエスの霊を通してであったのだ。どんな形のことば(語りかけ)であろうが、常に、その理解を助けるのは、イエス(神のことば)の霊だった。

そして、終りの時、人となった神のことばが、自らを伝えるために、人々に(新約)聖書を与えた。聖書を残した。弟子たち、使徒の教会を通して書き上げさせた。

イエスは霊によって、霊で導いて、聖書を残した。そしてイエスは霊によって、聖書(神のことば)の理解を人に与える。

だから「神のことば」である「聖書」は、完璧なる神の意図に基づいて、ありとあらゆるときに応じて、ありとあらゆる人々に、イエスの霊をもて、語りかける。これが真の聖書主義、普遍的聖書主義である。

「福音書」のことば以前、以後、以上のことば、イエス。聖書のことばは、イエスその人とのつながりにおいて、神のことばとなる。「いまもここにいてこれら福音書のことばを通して語っているみことばイエス」*57がいる。

聖書の完結と同時に、「上からの」人智を越えた啓示は閉じられる。しかし聖書のことばを通して「いま、ここに生きています」キリストは私たちに語りつづける。

生ける言葉、「永遠のいま」であられるみことばイエスは、福音書に登場する、キリストに出会った人々すべてに対してと同様、私たちに出会い、語られる。

神のことばイエスの霊に導かれて、イエスの教会が残した「神のことば」——聖書のことば——を通して、私たちはまことのイエスと出会っている。

ヨハネは手紙Ⅰに書いた。「わたしたちが書くのは、喜びが満ちあふれるためです」と(1:4)。なぜ喜ぶ? 犬養はヨハネに声を合わせて言う。「神は愛」(4:8)だから。これこそ福音。だから神のことばは人となったのだ。

ヨハネ福音書はその 13 章から 17 章までをイエスと弟子たちの「最後の晩餐」の夕にあてる。いわゆる「ほまれの部」である。ヨハネは最後の晩餐のイエスを書くためにヨハネ書を書いたとさえ思える、と犬養は述べる。

その「ほまれの部」はこう幕をあける。「イエスは自分が父のもとに帰るときが来たのを知り、弟子たちを極まで愛された」(13:1)。その夕、イエスは弟子たちに教えた。「いま、わたしは父のもとに帰る」(16:28)。それは「おまえたちを父

の家に連れ帰るため」である(14：3)。「わたしがその道である」、と(14：6)。

そして弟子たちに命じた。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合え」「わたしが人を愛したように、人も愛せよ」「それによってわたしの弟子であることをみな知る」のだ、と。(ヨハネ 13：34-35)

神が御子を遣わしたように、御子イエスは人に真理の霊を遣わすと約束した。そしてイエスの霊は「弱き」人を世に遣わすのだ。イエスの霊に助けられ、イエスに示された愛に従うとき、人は神とともにいる。

人は神のことばとなる。愛となる。イエスとともに神の「第二の創造」に参加する。みことばによる創造は今日もつづけられる。そして「各人の小さな歴史もまた『聖なる創造』の一部となる」のだ。^{*58}

本書『聖書のことば』をしるした著者のねらいは、聖書の読者が聖書のことばとは何かを正しく理解することだった。そのことばを通してイエスと出会うのを助けることだった。そしてそのために、自らが学んだキリストロギイ、基礎神学（神のことばの理解の原理）を真正面から描き出すことだった。それはカトリクであろうが、プロテスタントであろうが、あらゆる教派を越えた真実として、信徒・教会が共有できるキリスト神学を示す企てでもあったと言えよう。

8、まことのカトリシズムとは

『聖書のことば』においてカトリク、プロテスタント、あらゆる教派を越えて共有する普遍の真理、「神のことばであるイエス」を印象的に描き出した後、犬養は、教皇ヨハネ二十三世小伝である『和解への人』（1990）を挟んで、担当編集者から「犬養さんの集大成ですね」という言葉を引き出すことになる『天と地のシンフォニイ』（1993）を執筆する。この一著の主題は“カトリシズムとは何か”という問いの形をとる。それは、言いかえれば、この地上を歩む教会とは何か、最も普遍的、正統的、理性的で、健全な「教会」の理解とは何か、を問うことでもあったと言えよう。それはまたヴァチカン第二公会議の意義を、その開催の事実さえ知ることのまれな日本の読者に伝えようとする試みでもあった。

象を知らない人に目かくしをして、手であちらこちら象に触れてもらい、象とはどんな動物かを分かってもらおう。この象がカトリシズムである。それは神によって創られた一匹の特別な動物である。

キーワードであるタイトルの「天と地のシンフォニイ」によって、著者が何をあらわそうとしたかを考えることから始めよう。それは教会がその中におかれた全世界の姿、この世界の中にある教会の姿、その源泉、展開、神のリアリズムの結実、神が人と世界に与えた祝福の全貌である。

現代世界において、一般人の間には、カトリック教会に対するネガティブなイメージもある。さまざまなカトリック教会への反発があり得る。保守、頑迷、ドグマティックで無味乾燥、教皇至上（神の代理人至上で、キリスト至上でない）、自由の余地なき人間性の圧迫、等等。

ではそもそも、カトリック教会の本性とは？まことのカトリシズムとは？なぜカトリシズムなのか？

「カトリック教会は、普遍の神からのものごと（カトリシズム）をキリストを通して委託^{トラデレ}され、守りつづけるしもべと言ひ条、即カトリシズムではない、のである。即、福音ではとうていない、のである」*59と犬養は本書に書いた。

片や、確かに時には深刻に否定的な側面をも帯びた、歴史の中を歩んできた現実のカトリック教会の姿がある。その事実を直視する一方で、キリストに源泉を持つ、まことの^{カトリック}普遍教会、ヴァチカン第二公会議が（教会の現代化を通して）求めた、在り得べき教会の姿——キリストの意図した教会——を犬養はいまここで、現代人に問おうとするのだ。

犬養は前述「カトリシズムと私」で、文筆活動開始間もない頃、すでにこう書いていた。

「カトリシズムという奇妙な響きを持つ言葉は、元来、ギリシャ語の *Kat holon* から出たものであって、その意味するところは『普遍』であり『総合』である」

「私にとっては、カトリシズムは...包括的な『普遍性』そのものであり、また、物事を少しでも広く見たいと、少なくともおりにふれて意識させてくれる刺激剤でもあった」また自分は「理詰めにして行つて納得しなければ満足ゆかない」という性質の持ち主だった、と。

そして「むしろ、一切の所有物や性格——健康とか地位財産とか頭脳とか生来の悪人（そういう者が在るかどうかは別問題として）とか——を取りのぞいて、人格なるがゆえに、生命なるがゆえに、尊いということが在り得るか、つまり『存在』の問題にぶつかっていたのである」。そして「カトリシズムは西欧ではない。...一つの階級や一つの陣営に偏すことなく、共通の運命を分かち、共通の内なる深淵を抱く人間存在そのものの、偉大さと悲劇性と限界と可能性とを解き明かす上において、東西の別はあまりにも弱い意味しかもたないのである」と。

そして今『天と地のシンフォニイ』の結び（あとがき）において犬養は書く。

カトリシズムという生きた有機体は、二千年を生きつづけ、これをまた二千年をさかのぼる歴史がひかえ、天地の創世期をスタートとする。そして言う。「不可

見の天からのひそひそばなし、打ち明けばなしを、あまりにも不足不行き届きの人間の言語の、可能の限りを尽くして体系づけ、時代の進歩変容と歩をあわせつつ、『決して変化も進歩もしない天のものごと』を、つねに新しく展開させるのがカトリシズム」。それは「一切を疎外せず、一切と対話を交わし、共に和をきずき、一切に対しておのれを開き、ひとえに利他忘我」、ひとえに仕える。「このモデルこそはキリスト。カトリシズムはそのキリストを語り告げ証すべき、キリスト直系・使徒直系の生きものである筈。が、なんと度々自らを裏切りつづけてきたことか」*60

カトリク教会の歴史の中の姿を直視しながらも、その理想形はイエス直系でありつつ、一番開かれている「人間の集い」なのだ。

このようにカトリシズムを問う本書は、教会一致・和合への呼びかけである序文をもって幕を開ける。

犬養は述べる。「相互の出会い・対話そして和解和合の建設は、妥協からスタートするものではない。まず第一の必要事は、カトリク教会、プロテスタント各派、オーソドックスもろもろが、それぞれの、歴史的・使徒承伝的性格と信条と生き方とをもう一度、原点に立ちもどって把握しなおすことである」

犬養の思いはそこにあった。「こんごますます進展させるべき和合・合同運動の、一土台として、『カトリシズムとは何なのか』をまっさきにカトリク信徒一般が、ひいてはプロテスタント諸派の兄弟姉妹たちが、再考する上の極めて初歩的な手引き」を提供したい、と著者のねらいを明確にした。*61

この人間同士がばらばらに分断された世界で、引き裂く力（ディアボロス）に打ち勝って、^{モダニズム}教会こそがまことの和の証しとなり、神に託された使命を果たすため、まず何より（普遍的教会論として）カトリシズムとは何かを、人々の前に示さなければならない。

そして始まる第一章では、使徒言行録に書きとどめられている西暦 49~50 年の教会史上初の「公会議」（十二使徒とパウロによる）の記述が続く。このジェルサレム公会議の目的こそ、はや分裂の危機に直面した教会に一致・和をもたらすことだったのだ。そして、この一致は「各国各民族各人のそれぞれの多様性を十二分に生かしつつ、魂の奥底においての『神人たるイエズス・キリストの承認・彼への信と愛』というただひとつのものによって可能とされる」ひとつ心、普遍性によるものだ、と述べられる。*62 犬養がくり返し立ち戻るイエスの言葉は、ヨハネ福音書 16~17 章、最後の晩餐夕べに与えられた、愛によって結ばれあう和、

完全な一致にむけたイエス自身の「命令」である。私たちがまことにキリストを求め従う時に現われ出る教会。キリスト自身が求めた^{みほとけ}普遍の教会である。

源泉はキリスト。キリストの福音。教会は、そのイエスが世に來た目的の証しとなるべくイエスによって立てられた。その証しの最も純粹、簡潔な形、始まりの形がケリグマであり、「使徒信条」（シンボロス、一致した宣言）だった。その福音に仕えるため、イエス自身から委託されたのが「^ト承^ラ伝^デ」であり、「聖書」はその核となるものである。しかし、聖書だけではない。典礼もまた重要な要素である。神のリアリズムは人間のリアリティを尊重した。かくしてレス（神の民、信徒、普遍的司祭）に奉仕するハイアラキイ（機能的司祭）によるサクラメントゥム（道具）が教会に委託された。生きつづける「しるし」として。人間を証言者、協力者として神の親ごころの結実である。

主なる神は教会に対し、源泉を一つの時代から一つ時代へと手渡してゆくこと、その時代に合わせて展開してゆくことを望まれた。神のリアリズム（神の親ごころ）の具現である。「世界の中の教会」、「地上を歩む教会」である。

「宇宙的な、壮大な天地創造のスコープ」のもと「万物と人、人と人、人とイエズス、人と神の、幾重にも関連しあう一大規模での和（コミュニケーション・ユニティ）を再創造する目的で神が定め、人間に与えた」トラデレ。^{*63} 神からカトリク教会に託されたものである。逆説的にそれは、最も開かれた人々の集まりとなる。あらゆる民族、人々の差異を越えて展開されていく。人類すべて、世界すべてに開かれた教会。

では私たち、人々の^{エクレシヤ}“集い”、教会は、神が指揮者である天と地のシンフォニイの真ん中におかれ、その音色にいかに耳を傾けることができるだろうか。犬養は次にその「基礎」の確認を行う。神は人に二つの音色で語られた（筆者は著者の主張をそう表現したい）。一つは理性、もう一つは啓示である。かくて本書第二章では、神の真理——天と地のシンフォニイの調べ——を聴きわけるために人間に与えられたこの二つの恵み、理性と啓示が分け合う力ついて考察されるのだ。

カトリシズムの信仰において、理性の重要な役割が肯定されている。理性は神が（自らの肖像である）人間に与えたもの。理性は人間に対し、神について多くを教える。存在の秩序は人間に対し、神について、雄弁に語っている。神は宇宙的リアリティ（コミュニケーション）をコミュニケーションする。

天地のいっさい、全宇宙の源泉であり究極因である、人間の言葉で神としか表現できない「不死不滅で制約限界すべてナシの唯一の『いつも在る者』、創造の原

動力にして目的である者」が存在するという事は、（中世には聖トマス・アクィナスが論証を試み）現代の科学者の数多くがすでに認めるに至っている、と犬養は指摘する。その「一方で因果律や存在の段階の観察等によって、人間の理性が証し得るのは、神いますこと、にとどまる」のだ。^{*63}

そこからさらに進んで、その「在る者」「神」の内的生命となって来ると、神自身によって打ち明けられない限り（啓示されない限り）、人間には分からない。相手が人間の場合を考えても、ある人の精神の内面がどのようなものであるかは、その人と親しく、時をかけて出あい、語り、聞き入って少しずつ知ってゆく以外に方法はないだろう。もし示されなければ、だれに三位一体などということを発表できただろう（！）と、先立つ部分で犬養は書いていた。

その啓示の源泉こそ、人となった「神の子」キリストである。教会はその源泉、キリストを伝える。その祝福を受けた証人としての役割を担う。「神はどんな方であるか」を人に示すイエスを証しする。

一方で、キリストの啓示さえをも、与えられたとき、人は理性によって会得する。そして自ら選んで従う。

教会の証言、信仰（神がイエスを通して人に示そうとしたことの内容）はあくまで神がイニシアティブをとった打ち明け話（啓示）である。と同時に、人間は神に与えられた理性によって、その内容を自らのものとする。教会はこの啓示と理性の整合性を訴える使命も負っている。犬養は繰り返しこの二つの相補性を訴えてきた。理性と啓示は、それぞれの神の意図した役割を果たすことにより、超絶的な実在に対峙する偶有の何たるか、悪と苦の存在の理由、キリストがだれであるか、世界の秘義を光の中に照らし出すのだ。こうして本章残りの節は、各々がこのようなテーマの論究に当てられている。

9、世界と教会

『天と地のシンフォニー』後半章において、著者はまずこのシンフォニーのありのままの姿——実在する教会と教会の外の世界すべてが織りなす壮大な織物の、陰影のある絵模様——を読者の前に拈げようとする。

そこにはカトリク教会の持つ光と影、強さと弱さが両方織り込まれているのだ。

カトリク教会は、歴史の中の教会に内在する「罪」と正しく向き合い、キリストにあって克服し、すべての人々とともに前進しなければならない。

普遍の神からのものごとを、キリストを通して“トラデレ”され、守りつづけるしもべであったとしても、その人間性のゆえに教会はつまずいてきた。その道は起伏にとんだ道だった。中世末期の苛酷狭量な宗教裁判、異端者極刑、十六、七世

紀のラテンアメリカにおける「異教徒」原住民の大量抹殺、ユダヤ教徒への迫害…。キリストの僕にあるまじき思いと行いに身を任せた大誤謬、大罪。

真のカトリシズムを求めるものが、これらを正視して、赦しを請うことは必須の条件である。

そして「立ち帰り」の大道を歩もうとする者にとって、いつの日か到着するゴールに対する大きな希望（終末論）を抱きつつ歩むことが不可欠である。これこそが十字架の道である。

すべての総合、ありとあらゆるものを包み込む天と地のシンフォニイとは「すべての、それぞれ違う音を持つ楽器が動員され、折りにふれて不協和音律すらも抱き込む、複雑な一大シンフォニイ」なのである。*64

だからカトリシズムは「眼を以てつらつらと見、手を以てつくづくと触れ…極めて人間的で暖かい（そして弱さも十分に持つ）『母』のようなもの」なのだ。すべての子どもたちを胸に抱き「自らも矛盾を持ちつつ、あるいは持つゆえにこそ、天と地と永遠といまの時間とをひとつに結ぶ」のだ、と犬養は自ら信じることを語る。*60

かくして著者は、このシンフォニイの中で、非キリスト教徒、他の宗教に属するものたちが占める位置に目を向ける。この神の織物には、生きとし生けるものすべてが織り模様の中に織り込まれている。居場所を与えられている。その演奏には万物、万人が加わっているのだ。

犬養は本章で十九世紀英国公会堂からの改宗者ヘンリィ・ニューマンの言葉に寄り添って書く。神は「イザヤ預言書などの時代から、明白にはっきりと——いずこのいずれの民にであっても思想文化であっても、宗教倫理であっても、それぞれのただ中に自らのメッセージと真理をちりばめる者であることを次第につよく語る」*65

犬養はヴァチカン第二公会議の憲章、宣言、教令*66も論拠に示しながら、どの国、民族の文化、伝統にも、神は「善きもの」をちりばめられたという信条をしばしば語ってきた。神はモノポリ主義者ではないのだ、と。では、その「善きもの」とは？

神の創造した各地各文化すべてに、創造主の祝福が与えられているという思いは、教会の内にいるものも、外にいるもの人にも共有、共感しやすいものだろう。

犬養は歴史の中のキリスト教会がかつて土地の文化に対して示した不寛容、破壊行為の不幸について思い起こす。そしてキリスト自身、当時の土地のことば、ア

ラム語で語ったこと、そのたとえ話はみな、その土地の人間にとって一番身近で分かりやすい素材を使って話したことを思い出させる。また十六世紀、明国に赴いたイエズス会宣教師マテオ・リッチが宣教において、土地の固有文化を尊重しようとした姿勢などにも注目する。

そしてさらに一步踏み込む。犬養は万人の救い、善意の万人の救いについて、本書以前にも繰り返し思いをはせてきた。『聖書の天地』では、ヒンズー教徒、反キリスト教論者にかかわらず、聖書の語るところをそれとは知らずにすでに生き行っている人にとって、聖書はすでに限りなく近い、と述べた。『聖書のことば』ではさらに、目に見えるエクレシアだけが、神のことばを受けとり答えているのではない、と述べている。

本章で彼女は「カトリク洗礼を受けていないもの以外に救いはない」立場を取った「ボストン異端」（1947~50 年代初期）に対しヴァチカンが教皇名で明示した態度に注目している。「カトリクの洗礼を受けないものも、良心に忠実に、正しい日々を生き、誠実な人生を送るものはすべて神から愛され、神のよろこび（救い）に入る」*67

そして言う。「したがって、それらにのっとり公正と隣人愛（この二つは実はお互い補い合ってひとつとなるものである）を生きる人が、イスラム、アニミズム、ヒンズー、仏教等々の差なく、みな、救われることは、聖書伝統にたしかにのっとるのである」

ここまで来た時、キリスト教のそもそもの存在意義に対し、問いを投げかけたいくなる者が現れる地点にたどり着いたのではないだろうか。救いはキリストの名を知らない人にも及ぶのか。もしそうならキリストが歴史に介入する必要はあったのか？教会の存在意義は何なのか、と。

犬養はここで二つの答えを用意している。一つは人が意識しようとしまいと、キリストのわざの力、その必要は変わらない。そしてもう一つは、神は御子キリストの「生きているしるし」、人間による目に見える証しを待つ。神は（ガンジー、アンネ・フランク等など）一人ひとりに語っている。語らずにはいられない。しかし人が指差し、見ることのできる様相のもとに「証する」のを待つ。

しばらくののち犬養はこの問いに対して、さらに踏み込んだ洞察を見せるにいたる。だがそれまでには、もう少しの時を要する。*68

いずれにせよ、イエスの意図した、生み出した教会は宣言する。教会は「神のとのえたもうた共同共通の『人間のゴール』」に向かって、人間社会一切とともに

歩む」と。そして本書の最終章は「カトリシズムと社会」と題されている。

ヴァチカン第二公会議は 1965 年、その最長の公文書『現代世界憲章』の可決を最後に幕を閉じた。この文書は公会議会期中に逝去したヨハネ二十三世の最後の回勅「パーチェム・イン・テリス」の精神にもとづいている。^{カトリック}普遍教会が神の創造による世界を旅する時、その神に創られた世界のすべて、万人と対話する。普遍の“集まり”に託された使命である。

カトリック教会の社会性について、二つの対極をなす見方があるよう見うけられる。「左派陣営からは度々『政治に無関心すぎる』と評され、右派から『政治に介入しすぎる』と評される。保守的な信徒は、労働問題・国際政治軍事問題に大きくふれる教皇回勅が出るたびにショックを受ける。正義感あふれる若者信徒たちは、教会が革命的でないと非難する」*69 と犬養は指摘する。

そして、まことのカトリシズムの社会性とはどのようなものか、と問う。

時にカトリック信徒（キリスト教徒）は「世から逃避して」「信心にとじこもる」誘惑にさらされる。しかし“キリストが意図した教会”には、正しい“社会性”が求められるのは明らかである、と犬養は述べる。彼女が取り上げることを好んだ聖句にマタイ 25 章、終りの日のたとえがある。キリストを愛するとは、世の最も弱きものに手を差しのべることである。その一方で、地上を旅する教会とその信徒は、時としてこのイエスの求めにふさわしく応じてこなかったのだ。

人間である信徒を自己閉塞へと誘う力がある。支配欲、所有欲、自己至上欲は、この世的閉じこもり、エゴイズムの三つの代表的な形である。しかしこれらの誘惑を打ち破り、教会と信徒を解放してキリストに従う道に歩ませるべく働いてきた力があつた。「神との協力本願」の力である。「三つの欲から完全に出たい」との心底からの祈りによって、人間社会一切と歩むことが可能になる。彼岸に最終の眼差しを投げ、絶対至高の存在に向けることにより、この歩みを続けることができる。このようにカトリシズムの本質は「世にあって、世のものでない」社会性なのだ、と犬養は述べる。*70

信徒の日々は、極めてパーソナルな「内面の生」である一面を持ちながら、つねに時代と状態に目を向け、すべての人々と社会・世界に仕えねばならない面において、極めてソシアル（社会的）なものとなるのだ。

かくて十九～二十世紀にかけて、現代世界を特徴付ける社会の問題、人々の苦しみが、多くの目に明らかに現れるようになった時、カトリック教会はこの“時のしるし”に対して、望まれる応答を始めたのだ。一連の教皇の（社会）回勅（レオ十三世「レーラム・ノヴァールム」（1891）、ピオ十一世「クアドラジェシマ・アン

ノ」(1931)、ヨハネ二十三世「マーテル・エト・マジストラ」(1961)、「パーチェム・イン・テリス」(1963)など)に、犬養はその精神の最良の証しを見る。そしてヴァチカン第二公会議実現の時を迎えたのだ。公会議直後のパウロ六世回勅「ポプロールム・プログレシオ」(1967)は犬養自身を難民地、飢餓地へと赴かせる大きなきっかけとなったものである。

戦中の受洗を経て、本稿ですでに示したような道をたどって、カトリク信徒預言者・文筆家の召しへと導かれてきた犬養にとって、まさに自明のカトリシズムの理解であった言えよう。この土台に立って犬養は、現代を特徴付ける問題群に対し、次に見るような(左派・右派を超越した)確固たる姿勢を示す力を与えられたのだ。^{*71}

「たとえばブラジルの、でんと居坐って動かないかに一見、見える社会構造・経済のしくみの裏に、スイスの巨大な銀行の力と N とか C とかの大企業のもうけ一本槍主義とそれにのっとり行動のあることがはっきりしたとき」いったい何をすべきか、と彼女は信徒に問いかける。

「最初から不公正にのっとり社会構造や経済の作り出しつづけた『状態』が生み出した貧富間の一驚すべき格差と、それにもとづく対立と、分裂・憎しみを是正すると、口で言いつつ、『ひとりの神、ひとりの主キリスト、ひとつの洗礼』を分けあう者たちが、お互いの和合、理解を拒む?これ以上の矛盾はないではないか」と訴える。

第三世界の解放策を求めて活動することは、体制維持、現状維持を望む人々にとって「最も好ましくないものであるがゆえにイヨイヨ、生命の危機と同居する。事実、カトリク教会のハイアラキイのひとつだけをとっても、中南米の惨地で何人、いや何十人が殺されたかわからない」と指摘する。

新自由主義が飛ぶ鳥を落とす勢いで動き出した 1990 年代前半に、犬養はこのような態度をはっきりと表したのだ。

そして「政治の世界に、キリストの正義とメッセージをたずさえて入るリーダーの養成」の喫緊性を訴える。教会内のサクラメントウムの人々が政治の分野に正面切って出ることは望まれていない。「レスと呼ばれ、キリストの普遍の司祭職——その中には、世に神の公正を告げる預言者職も含みこまれる——を身におびて、ほんとうに実際にキリストの(普遍の)司祭となっている筈の信徒こそ、正面切って第一線に出る者。そういう目ざめた信徒が一人でも多く育つように助けるのが、サクラメントウムと名づけられる機能的司祭職のひとつつまりハイアラキイ」である。

回勅ポプロールムやマーテルははっきりと主張する。カトリク、プロテスタント、無神論共産主義者（無神論共産主義ではない）にかかわりなく、公正、他者への愛を願うすべてのものは、お互い対話を交わし、共に働くべきであると。そのために「異なる信条を含める異文化・異民族とのポジティブな出会いをまず持つべき」であり、それらの出会い・対話の起点は、「われわれもまちがった、誤謬を犯した（ヨハネ二十三世、第二公会議冒頭での発言）」という謙虚な認識と「共産主義者の中には、真に透明な、正しさを求めてやまぬ実践者が多くいる。われわれは彼らを手本とすべきである」（公会議中の一分科会でのことば）という正直さである、と犬養は声を強めて言う。

『フリブール日記』（1981）に描かれた彼女の難民問題との出会い、それらに対する取り組みの始まり、『人間の大地』（1983）という日本において、第三世界の直面する問題の真相をほぼ初めて「一般」の人々に明らかにし訴えようとした試み、これらは以上のような背景から生まれるべくして生まれていった。

まことのキリストの“集い”にあって、私たちはカトリク・プロテスタントの「神学・教義上のちがいを強調するのではなく、人類全体の生存上に曾てない危機をもたらしつつある現代諸問題群に、兄弟姉妹として共に」力を振りしぼって対処することが神によって求められている、と彼女は強く訴える。

戦前、著者は犬養生家で育つ中、白樺の理想に出会い、またその理想を無に帰するような日本と世界の愚かしい現実の板ばさみの中で聖書に出会った。彼女はその理想の完成を「カトリシズム」、キリストのからだとしての普遍（カトリク）教会、その人類に対する普遍なる隣人愛に見出し、手に入れたのだ。

10、旅する神の民

そして 1995 年、『聖書を旅する』全十巻（1995～2003）の刊行が始まった。1990 年代後半、犬養は自らの信徒使徒としての歩みをしめくくる時期に入ったことを意識し始めていたにちがいない。聖書でキリストに出会った犬養は、こうして再び聖書に戻る。十巻の構成はまさに犬養が長年の活動を通じて示してきた問題意識の広がり、それら問題と聖書の関わりを総括しておこうとするがごとき意気込みを感じさせる。人間としての女性を問い（四巻）、普遍的教会史の中で宗教改革とプロテスタンティズムを見つめ（五巻）、信仰の美術的な表現の魅力を語り（六巻）、現代世界の分断、苦難に信仰者として向き合い（七巻）、人間存在から見た民族固有の文化を考える（八巻）。

壮観の十巻の中から、私たちがここで注目すべきは、聖書そのものを主題に据えた第一巻～第三巻（第一巻、第三巻の最初の形は雑誌マリ・クレール 1992.2

～1993.5、及び 1993.5～1994.6 にそれぞれ連載）、そして第九巻～第十巻（構想執筆開始からほぼ十年後、第一～三巻をさらに補い深める）であろう。

このシリーズ刊行のきっかけは 1988 年聖書セミナー後、内容を「読み直すにつれ、表面的であったことに気づき、書き直すべきであるという強い思いに駆られた」ことにあったと言う。犬養がこの『聖書を旅する』刊行に託した思いとは、どのようなものだっただろう。

全体の要とも言うべき第三巻『福音と福音書』の扉には二つの引用が掲げられている。一つはアウグスチヌス「新約は、旧約の中にかくされ、旧約は、新約の中で明らかにされる」。もう一つはプロテスタント神学者カール・バルト「かんじんなことは、聖書に記されている神のことばを...その都度の現在において聞くことである」。この二つの言葉は犬養の意図を考える最適の手掛かりを提供している。ここから何が読み取れるだろうか？

信徒預言者としてのヴォッカチオを示されて『新約聖書物語』を書き上げた時以来、犬養は心して「福音」の「現代化」に取り組んできたことを見てきた。

そして今、聖書とは何か、人に何を語っているのか、神とはどんな方か、人に対して何をなさろうとしているか、イエスとはだれか、何のために生きたのか。これらの問いへの答えを、犬養受洗のほぼ半世紀後、イエスの地上の生涯の約二千年後、“いまここで”生きる人々に対し、全力で伝えたいと願ったに違いない。

今日を生きる我々が、聖書を通して、福音であるイエスにいかによりよく出会うか。いかにイエスとともに生きるか。これはまさに犬養自身の目指し歩んできた人生でもあったはずだ。

犬養は第一巻を「死海文書」発見など新しい歴史的発見・学問的研究によって、懐疑的な研究者から一時はその福音書としての歴史的真正性への疑問が強く投げかけられた「ヨハネの福音書」の真正性が改めて確かめられた、というエピソードから始めた。

日進月歩の聖書学を通じて、自らの聖書の理解深化の研鑽を怠ろうとしなかった彼女は、現代聖書学の最新の到達地点をふまえ、自らに可能な最善の「手引き」を残そうと試みたのだ。最新の知的成果の上に、聖書を正しく読むこと。それはまことの聖書のメッセージ(福音)を届けること、現代の人々（聖書を知りたいと望んでいる人々）が、聖書を通してイエスと出会う助けをすることと矛盾していないどころか、最も必要とされている条件であると犬養は信じてきた。

またそれは同時に、ヴァチカン第二公会議後の今、キリスト教会は分裂の時代を

乗り越え、一つの神の民としての歩みを取り戻そうとしはじめた、その前進に貢献したいという信念に満ちた思いと重なっていた。この分断の時代、教会こそ和の証し、聖書こそ「和の書」として、人々の前に取り戻したいという沸々たる思いと一つのものであったはずだ。

その背景には、二十一世紀開幕の頃、戦後五十年を迎えていた世界が呈しているありさまに対する犬養の憂いがあったろう。冷戦後の世界各地に現れつつある混沌（犬養の一民間人・信徒としてのこの時期のこの「混沌」への応答・行動は、90年代中心に雑誌『世界』に連載され、後に複数書籍にまとめられた執筆で知ることができる）、その一方で浮世を漂うごとき（バブルからバブル崩壊へかけての）日本社会の現状に対し、信徒使徒として、世に神のことばを伝える使命を問い直していたに違いない。

第一巻の冒頭近くにこう書いている。「平板」で「顔がない」日本人。毎日を「夢見心地に、時の流れに身をまかす生き方」の現代（1990年代）日本人の心を開きたい。聖書の示す「立体的世界観」を伝えたい、と。

そして最終巻第十巻の「序に替えて」にはこう書いた。

「こんにち。二十一世紀の初め。世界で何と大問題の起こりつづけることか。人間史にはいつもどこにも大問題はあったけれど、現代の特徴は、『局地での問題が直ちに全世界に及ぶこと』、『スケールと質の大きさ深刻さにおいて過去とはまったく違うものであること』、分裂多く、痛みと不安にこと欠かぬわれわれの時代、学校崩壊とか家庭崩壊とか教育改革とかに人々のなやむ時代。...地球上での貧富格差が広がり、飢饉と飽食の共存する時代。...大規模なテロが超近代テクノロジーを使用して各地に無差別に起こる時代。今後の世界を一変させるかの大量破壊兵器使用の戦争を生み出す時代」

彼女がこう書いたのは2003年だった。そして続ける。

「そんな時代を生きる人は、何を求めて聖書を手に取るのだろうか。

求めるのは『学問』ではない、『出会い』であろう。『分析』ではない、『魂に語りかける何ごとか』であろう。...『生と死の謎への答』であろう...キリスト教の信仰とは何かを知りたい求めでもあろう」*72

そして第三巻の「まえがき風序章」で犬養は、自らの信徒預言者としての歩みを貫く目的をこう再確認する。

「福音書は、とどのつまり、読者を彼イエスとのパーソナルな日々の出会いに導く」「集まりを形成するひとりひとりが、『いま、ここに』神秘的にいるキリスト・イエスその人をパーソナルに知り、パーソナルに彼に聞き入り、彼と語らい、

彼と出会い彼の生き方を真似るためにも読む」*73

聖書とは「福音」そのものであるイエス。「いつでもどこでもだれにでも」語りかける普遍のことばである。

一人ひとり（個）と「普遍」との出会い、それは一人ひとりが真の自分になることを可能にする出会いでもある。

最良のカトリクは最良プロテスタント的なところがある。最良のプロテスタントは最良カトリク的なところがある。その最良の信徒の集まりを犬養は^{カトリク}普遍教会と呼ぶ。

こうまとめることも出来よう。歴史の流れの中で、物理的にも、そして文化社会的にも、イエスが人となって地上を歩んだ日々から、日ごと年ごと離れてゆく。しかし神は人間一人ひとりに理性を与えられた。聖書を通して、よりよくイエスと出会うためには、その理性により、全力で、イエスが教会を通して残した聖書（使徒承伝）に向き合わねばならない。その意味、メッセージを正しく自らのものとして理解しなければならない。犬養は生涯の仕事を通してこの思いを貫いた。その一貫した試みに対し彼女は、例えばここでは、「新聖書学」の名を冠して呼ぶのだ。

各巻には、聖書が書かれた時代と社会について、その歴史的、学問的研究成果のさまざまな知見が取り入れられる。例えば創世記（第一巻『古代史の流れ、旧約聖書』）。創世記には聖書全体を構成するさまざまな表現様式がほぼすべて含まれていると犬養は述べる。「小説」的物語、詩、おとぎ話風説話、掟・規律、歴史、残虐・戦い、当時のさまざまな「文学類型」。そのすべては当時のオリエント世界に知られていた伝統を踏襲して書かれている。例えば古代メソポタミア文明域に広く存在した“神話”物語伝統のボキャブラリーで世界と人間の歴史の始まり、「創造」の真理が語り上げられているのだ。モーセの十戒の背後にはハムラビ法典的伝統の存在があった。また出エジプト物語の背景となったエジプト・ヒクソス王朝と聖書叙述内容との関係を明らかにする。イスラエル王朝史をバビロニア・アッシリア古文書内容の光にあてて理解する、等など。

また第二巻『約と約の間』では、新約聖書を理解するにあたって、その背景として、当時の「ユダイズム」理解の重要性が取り上げられている。イエスは旧約の民の一人、ガリラヤに暮らした人だった。イエスの語り方、教え方は当時のシナゴグ（ユダヤ人集会堂）の伝統を背景としている。当時の民にはすでにそのままでは容易に理解できなくなっていたモーセ五書を、おはなしやたとえ話など

も含め分かりやすく解説・注釈するハラカア、ミシュナ、ミドラシュ、ハガダア、タルグムといった伝統、方法である。イエス自身だけではなく、福音書記録者もこの伝統の中で生まれ育ったものたちだったのだ。例えばマタイやルカのイエス降誕物語の語りのルーツはここに求められることが指摘されている。

そしてシリーズは『聖書を旅する』と題された。ここではキーワード「旅」から始めよう。第一巻第一章。わたしたちは聖書を知る旅に出る、と宣言される。だがそれと同時に聖書の旧約から新約へと至る道が、まさしく大いなる旅、ゴールを目指す旅にたとえられる。聖書の旅と、人類の遥かな歴史の旅、また私たち一人ひとりの人生の旅が重ねられる。犬養の大きなメッセージは、本質的な意味において、人間の生とは「旅」であることを教える書物、その旅の伴侶となる書物、それが聖書なのだ、ということである。その「旅」とはどんな旅なのか。

「聖書はあくまで、文化以上の――はるか以上の――不可見の精神領域に立脚する書物なのである。...言いかえると「時間内」及び「時間を超絶する世界」双方にまたがる巨大な精神史。いったい、これほどの...一大遺産を生んだ土地や・民はどんなものだったのか」*74と犬養は問う。

聖書とは一民族の記録でありながら、民族を越え、すべて人間の財産として与えられた「一大古典」であることを、ここで著者はもう一度一般読者に思い起こさせている。聖書に示される旅、それは「神」に向き合った人間が織り成す立体的な体験史、と呼ぶに値するものである。

第一巻『古代史の流れ、旧約聖書』、ここで中心となる経験はモーセに導かれたとされる出エジプトに始まり約束の王国を求める民の歴史である。自らを「つねに在る者」(YHWH)と名のつた神が、当時カナンの地に入乱れて住む民の中でも、取るに足りない、文化程度も高くなかった一民族、イスラエルの民を選び出して、自らの大いなる計画のためにいかに教育を施していったか、旧約聖書とはその教育の一步一步、細かいステップの記録として読むことが出来るのだ。

その上で、この聖書の民の特別な体験史を特徴づけるのは、先に掲げられたアウグスチヌスからの引用に凝縮されているように、民が受けた「約束」であることが再度強調される。旧約は主を待ち望むもの、その彼らに約束された「生の地」、その実現の希望に生きた民の記録である。

だが、民に語った神が与えたかったのは、旅の目的地の約束だけではなかったことを、犬養はここで強調する。

そもそもなぜ聖書は生まれたのか。千年以上の時の年月に跨り、数え切れない

人々が、一冊の書物を編み上げた。神のことばを聞くという思いに一つにされて。

「何のための神のことばか...約束か」。それは「高みから垂直にくだる神の（不変普遍的）ことばによって『一つに集められて生きる』『人々の集まり』形成」である、と犬養は書く。

「ほぼ千年の年月をかけて編集完成される以前の...、完成後さらにはそののちもずっとこんにちまで、未来まで、『神のことばと約束』は、文書以上の、はるか以上の、『固有の生き方』すなわち精神文化形態を、全国各地の習慣を十分にとりいれつつ育てあげ、育てながら『集まりの民』をつよめつづけた」。「数人が心ひとつ集まるところにわたしはいる」（マタイ 18：20）とイエス自身、弟子たちに語った。聖書は「集まりの生き方」を生み続けてきたのである。人は人とともに生きる。旧約は民を一つに集めようとする神の「ことばと約束を受けた民の体験史」だった。*75

と同時に「聖書の旅」は「混乱に満ちた体験史」でもあった。その中には戦争の話、皆殺しの話、姦夫姦婦の話、憎悪、欺き、謀略、反逆、分裂、このどこが聖なる書、聖なる歴史なのかと多くの読者は問う。だが、これこそが人間の現実の営みであろう。ちっぽけな民の、とうていではない土地での経験を通して、人間という存在のあらゆる面を書き尽くす書物。そこには、なんと度々「今のこの私」が登場してくることか、と犬養は思いを述べる。

「聖書はいま、あなたの中で心の中で生き方の中で、書かれている」。聖書を貫くテーマ。それは「きょう、聞け」ではなかったか。

「神は、醜いおそろしい、しかし善の可能性をも十分に含む『人間たち』の体験史を通して、いつも語り、福いに向けていつも招く。きょう、いま、招く。神と人の心とが出会う時は、きょうしかない」*76と犬養は読者に呼びかける。

そして神は、民の歴史の中で、私たち一人ひとりの人生の中で、語る。「神は人間に何がしたいか、そもそも神とはだれなのか、神は人とどうかかわりあいたいのか」を。私たちは聖書を通して知る。人間の旅は「人間の救済史」である、と。でも、こんな抽象的な単語を聖書は決して使わない、と犬養は付け加える。

聖書、創世記は「神は善しと見た」とくり返される祝福に満ちた世界創造の記述で幕を開け、黙示録「新しい天地があらわれ...もはや涙もない、死もない、苦もない」と結ばれることを犬養は強調する。人間の究極のゴール。命。しかしこの世には「涙も死も苦もあふれている」。人の罪過の帰結として。聖書とは、この二つの間を、神を伴侶に歩む（人生の）旅路の物語である、と犬養は述べる。「善きフィナーレにどうやってたどり着くか」。一人の人間の生、そして人類の歴史

の旅を総括する究極課題である。

11、「すでに」と「いまだ」のあいだ

そして聖書は、新約聖書でその約束の成就を伝えるのだ。

「旧約は新約の中で明らかにされる」（アウグスチヌス）。新約は旅の目的地について語る。私たちはついに旅の目的地を見つけた！その証言！約束の成就宣言としての福音。信じようと、信じまいと。

『聖書を旅する』第三巻は『福音と福音書』と題されている。

福音書は私たちに旅の目的地、「山頂」からの眺めを与える。どのような眺めか？

イエスは自らの地上の歩みの終り近く、弟子たちに向けて「終りの時」について語った。それは旅の目的地への到着の予告なのか。

また“ヨハネ”は黙示録で、イエスが与えた「人間の歴史の終着点」のビジョンを語った。新しい天と地。新しいエルサレム。命の国、光の国。涙はもうない。

イエスはまた弟子たちに「神の国」、「天の国」について語った。これもまた旅の目的地の表現にちがいない。「神の国」「天の国」とは？

犬養はイエス自身が使った固有の言葉（ロジア・ロジオン）を考察する試みに注目する。「神の国」はイエス自身がくり返し使ったことばであり、新約にあらわれる新しいことばである。イエスの口を通して 111 回使われた。^{*77} それは旧約で使われなかったことばだった。

イエスの公生涯最初の宣言は「神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」だった。これこそが「神の子イエス・キリストの福音の初め」だったのだ。（マルコ、1 章）

私たちの旅は神の国へ向う旅だった。そしてイエスによる約束の成就、神の国の開幕宣言がなされたのだ。これが福音。イエスは自分がその到来を告げるために来たと、弟子たちに語った。

また、イエスは数々のたとえ話を通して、人々に神の国について教えた。

たとえ話の原意は「謎」である。解かれるべき謎。それは福音のレジュメであると犬養は述べる。解かれるべき神の国の奥義。

イエスは語る。神の国は「種蒔き」のようなもの。パンを生みだすイーストのようなもの。「隠された宝」のようなもの。それは、“天のものごと”を驚くべき身近な言葉で語る、日常のもので。

それはよろこびの素である。すでにもうここにやって来ている。私たちの真ん中にある。

それはすでにここに育っている。

イエスがたとえ話で語るのは神の国のさまざまな条件であると言えよう。しかし、自らが来た今、神の国はすでに来た、と宣言したのだ。

福音とはイエスその人だった。神のことば、神のしるし、人となった神。

犬養はコンガールを引用する。「福音とは何か、すでに来られたことが高らかに（証人である使徒を起点としその後もまちがいなく）告げ知らされ、今現在ここにおられ、ダイナミックに働きつづけておられる、キリストそのもの」*78

中世聖書学でも、プロテスタントがでて、同じ。福音は、いまここにいるキリスト。私たちはいまここでイエスと出会える。

私たちの真ん中にある神の国とは、福音である「すでに来られ、いまここにおられ、こんごも語りつづけられるキリスト・イエス御自ら」（教父イレネウス）ではなかったか。命をもたらすメシア。

イエスは来た。人となり、人ともに生き、人を愛し、人として死に、復活し、天に入った。そのイエスが、いま、ここにいる。

犬養は第三巻巻末でヨハネ福音書「しるしの部」（1章19節～12章）に注目している。第十巻ではさらに考察を深める。

ヨハネは福音書でイエスのしるしについて書いた。ヨハネは「奇蹟」のわざをしるしと呼んだのだ。多くの聖書読者は福音書が語るイエスの「奇蹟」のわざにつまずく。福音書を「非神話化」したブルトマンのように。「奇蹟は人を遠ざけるためにある」とパスカルは述べた。

犬養が指摘したように、ヨハネは「たとえばなし」を書かない。「しるし」を書く。共観福音書が「奇蹟」（ディナミス）と呼んだものをヨハネは「しるし」（セメイオン）と呼ぶのだ。そしてヨハネ書のイエス自身はこの「しるし」を「わざ」（エルガ・エルゴン）と呼んでいることに犬養は気づいたのだ。そして、この語は、とりもなおさず、旧約聖書、創世記で神の「創造」を意味する語として使われていることばだったことに気づいた。

イエスの力あるわざ「奇蹟の力」は「創造の力」に他ならない。それは「復活の力」、「新創造の力」なのだ。

それなら神の子「イエスが公的生活の間を通して、『彼だけに出来る新創造の、もはやそこに来ていることのしるし』を度々見せたのも、当然のことだった」とヨハネは言いたかったのだ。*79

「それなら新創造の幕開けとしての復活は...『神話的』『奇跡』ではなく、むしろ

ろ当然のこと」だった、と。*80

人生の旅の、人類の旅の目的地、神の国。私たちはそこを目指して旅し、「いまだ」たどり着いてはいない。しかし、神の子イエスが復活した時、私たちは「すでに」真の目的地「神の国」の、その「新創造」の幕開けを目の前にしている。失われた国の再創造。私たちは神の国を知ったのだ。確かな証しがすでにここに。真の目的地の証し。今と永遠の架け橋。神の国は私たちとともにある。天（神の国）と地（いまここ）をつなぐもの、イエス。人となった神。人々に示した、その愛のわざ。その十字架の死、そして復活。

イエスに出会ったもの、すべてのものは、すでに歴史の終点に達し、終点を生きている。終りを生きる。神の国はそこにある。始まっている。

私たちは神に与えられた自由によって新創造に参加する。人間は元始にその自由を使って神から遠ざかった。今、その自由の力で、神の国の創造にたずさわる。創造とは“自由”の行使、体现である。

イエスを知り、その愛を知り、イエスに従い、イエスのように愛する。私たちは、私たち自身の愛のわざによって、イエスと一つになる。神の国をここに生み出す。神のプレゼンス。

キリストは天に上げられた。天とは、あらゆる今とここ。

イエスはここにいる。私たちがイエスの肖像、似姿となる。これこそは約束の成就。これこそは神の国、天の国。

私たちは神の国いる。自ら選びとることによって。

犬養は述べる。「イエスの復活が『新しい天地をひらく（黙示録 21：1~5）』という、途方もない一大創造のわざ（エルガ・エルゴン）であったのに、イエスは（また神は）その大業のものはやじまったこと世々に知らせつづける大仕事（エルガ・エルゴン）を、なんと、ちっぽけな人間たちに委託した」のだ、と。*81

12、天と地をつなぐもの

犬養は「カトリシズムと私」で語った。

カトリシズムとは、普遍であると。

そして、私がカトリシズムを愛するのは、それが「生を愛する」勇気を、ひとすじの糸にも似て綿々と、与えつづけてくれるからである、と。

彼女は、ことばの外で、こう続けていたのだ。それは、自分だけでなく、この地上に生きた／生きるあらゆるものに「生を愛する」力を与えるものだ、と。

「普遍」とは、生きとし生けるもの、この世に存在するもの、ありとあらゆるも

の、そのそれぞれがそれぞれであるままで（その限界とともに）、すべてを肯定することではなかったか。そのことごとくが、自分自身を肯定できることではなかったか。

だから犬養は「一切の所有物や性格を取りのぞいて、人格なるがゆえに、生命なるがゆえに、尊いということが在り得るかどうか」だと言った。

しかし、どうやって？

それぞれが、大きな違いを身にまとったまま、それぞれがそれぞれであることによって、普遍になる。祝福を受ける。義を受ける。真実になる。本当の自分になる。そんなことが可能か？

偶有、過ぎゆき移ろい変わるもの、限界あるもの、一回きりのもの、小さきもの、弱きもの、貧しきもの——人間——が、自分自身であることによって祝福を受ける。命を受ける。

死と苦の道も、生と幸いの道に変わる。かなたを望み。天に心を向け。

犬養はカトリシズムに答えを見つけた。「カトリシズムはキリストである」

神が人となり、人ともに住み、人を愛し、人の憎しみを受け、十字架にかけられ、底に下り、復活し、いま天にいます。

イエスは来た。「神が人間の条件を体験することによって、人間に神（のよろこび）を体験させるため」。^{*82} 百人隊長は十字架のたもとで言った。「本当にこの人こそは、神の子だった」

犬養は、このイエスを信じ、従う決意をした。選んだ。自由に。

神の国はすべての人に及ぶ。すべての人は受けることが出来る。

選ぶことが出来る。自由に。神の愛を知り、神の愛を受け、自ら愛することによって。

でもこの救いは万人に及ぶのか？キリストを知らぬものにも及ぶのか？義人でない悪人は？これこそは犬養の（そして私たちすべての）前から決して立ち去らない世界の秘義だった。

犬養は『聖書を旅する』第九巻『歌う人、祈る人』の結びに近づく部分に書く。受難週、金曜の午後、イエスは「人間はじまってこのかた万人の眠る冥界に入った。入ったからこそ、立ち上がることが可能になった。アダムもいた、エヴァもいた、アブラハムも、モーセも、ダヴィドも...民族国籍と全く関係のない人々すべ

て。すべてがキリストによって『立ち上がった』」*83

では、義人ではない、悪人は、と犬養は問う。そして書く。

「聖書学や基礎神学と少々別の領域で、筆者は思う。（人間の裁判官ですら情状酌量という正しい調べを行う。）神は、自由選択力を与えた『愛する人間たち』のおこなった悪をめぐって、人間には決して分からぬ各人の心の底の動きや、自己責任や、周囲の状況をちゃんと見てとって、『各自の生涯のおこないとによって』裁くであろう、と。一瞬にすぎぬ悔いの心も、みのがさないであろうと」

そして終巻第十巻ではさらに聖句にも目を配り、イエスが刑死後、復活までの「三日」の間いたのは「水のない穴の底」（ゼカリヤ 9：11）、「地の最も深い底」（エフェソ 4：8-9）であること、トマス・アキナスはこの語を「地獄」とともに使っていることを指摘する。そして書く。

「キリストが自ら死んで『死者の世界』に入った以上、死者の世界——一応、地獄と名づける——にも救いの光は入った…。神も他人も一生拒否しつづけた死者たちの魂には？神の正義がきびしく示し出される永劫の「死」か？われわれにはわからない……一生、悪だけをおこない望み続けたような人が果たしているかどうか分からない……分かるのは神とキリストだけである」*84

また正反対の疑問を投げかけるものもいるに違いない。では「アウシュビッツやヒロシマを体験し、むざんに殺されていった人々はどうなるのか」と。

前出『歴史随想パッチワーク』終章で犬養は書く。神の時間と人間の時間の違いについて。神はいつも在す。あらゆる歴史には「永遠に対照する」意味が与えられている。一人ひとりの苦難には、はかりがたい意味が与えられている。業苦を通る人々の最もつらい時間に、人間の目と心には見ることの出来ない光と力が与えられる。人が「死」と呼ぶものは、神には違う内容を持つ、と。*85

『聖書を旅する』第三巻序章の結びで、犬養は祈りとしての福音の姿、福音の在り方について書いた。耳で聞いたイエスのことばに深く分け入って、ほんとうに生きている人々について。

アフリカ奥地の難民キャンプの片すみや東南アジアや旧ユーゴの掘立小屋のかりそめの宿の奥などで、著者自身、使徒承伝の、福音のメッセージの核心を日毎、心にしかととどめて思いめぐらす人々にどれほど出会ったか知れない、と語る。そういう彼らの祈る姿。世の終り——終末観——とはこういうものを指すのではないか。彼女は書く。「世を支配する権勢欲や統治欲やイデオロギイ政権のむざんな押しつけ——彼ら難民はすべて、それら『世の力』のはじき出した犠牲者である——

が、彼らによって『終り』にされ、替ってめざましい『善』が新しく（小さく、人目につかず、しかしリアルに）生まれ出ている……『世と終末』とはこれであるかも。『神の国』はそこに来ていた。『福音』はそこに来ていた」*86

祈る姿。一人の小さな弱き人間がイエスのわざを継続させることが出来る。神の国をここに在らしめることが出来る。

ほんとうの自分を見つけること。この自分、今、ここにある自分が永遠、普遍的になる。天と地をつなぐ者となる。

神の国創造の七日間。私たちはその六日目にいる。そしてきょうもまた新創造に旅立つ。イエスとともに。六日目の旅。

注

1. 固有名詞や原語のカタカナ表記について、犬養は特別の思い入れをもち、特有な表記を多く用いる。本稿では多くの場合著者の表記に従った。直接引用以外では一般的な表記に戻した場合もある。
2. ルドルフ・ブルトマンの用法を念頭に置く。
3. 犬養、1976、p.650.
4. 評論家神谷光信は『花々と星々と』を文学的な深さの感覚にあふれた、犬養の作家としての最高峰と呼んでいる。（神谷、2007、p.55）
4. 犬養、1980b、pp.376-7.
5. 同上、p.32.
6. 犬養、1998b、394、及び 1998c、pp.367-8.
7. 犬養、2006、249.
8. 犬養、1974、pp.15-22.
9. 同上、p.232.
11. 犬養、1980b、p.39-41.
10. 同上、pp.66-68.
11. 同上、pp.219-220.
12. 同上、p.171.
13. 同上、p.267.
14. 同上、pp.268-71.
15. 同上、pp.383-400.

16. 同上、pp.409-20.
17. 同上、pp.426-33.
20. 犬養、1984、p.231.
21. 犬養、1980b、pp.434-37.
22. 犬養、1964、pp.15-17. 他の多くの収録エッセイと異なり本篇には初出記載がない。
23. 犬養、1998b、pp.393-4.
24. 犬養、1976、p.649.
25. 犬養、1977、p.510.
26. 犬養、1969、p.418.
27. この当時、犬養は 1970 年から 1997 年まで続くヨーロッパ在住第二期に入っていた。
28. 犬養、1972、裏表紙。
29. 犬養、2006、p.218.
30. 犬養、1998g、p.365.
31. 同上、p.368.
32. 犬養、1972、p.144.
33. 犬養、1981、pp.102-03.
34. 同上、p.283.
35. 1990 年前後、雑誌『世界』への寄稿で犬養は述べている。「プロテスタントへの深い友情と尊敬を持ちながら、私がなおカトリシズムに生命を賭けてもとどまるのは、それが使徒承伝・キリスト直系だからである」と。
(犬養、1993a、p.229.)
36. 犬養、1998g、pp.-37.
37. 同上、p.12, p.357.
38. 同上、p.307、p.359、p.322 及び 1998h、p.7.
39. 同上、pp.350-52.
40. 同上、pp.340-58.
41. 同上、p.11.
42. 同上、p.236.
43. 同上、p.14.
44. 同上、pp.311, 324-25.
45. 犬養、1976、p.647.

46. 同上、pp.184-87.
47. 同上、pp.254-57.
48. 犬養、1984、pp.265-66.
49. 犬養、2008、p.295.
50. 犬養、1964、pp.2-3.
51. 犬養、1981、pp.19-26.
52. 同上、pp.31-42.
53. 同上、p.303.
54. 犬養、1986、p.349.
55. 同上、p.282.
56. 同上、p.94.
57. 同上、p.150.
58. 同上、pp.118-35、pp.282-83.
59. 犬養、1993b、p.189.
60. 同上、pp.285-88.
61. 同上、p.8.
62. 同上、p.32.
63. 同上、p.103.
64. 同上、p.160.
65. 同上、p.179.
66. 「教会憲章」、「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」、「信教の自由に関する宣言」「現代世界憲章」など参照。（日本カトリック司教協議会、2013b,d,g,h）
67. 犬養、1993b、p.181.
68. 本稿第12節 pp.68-69 参照。また「神のちりばめられた善きもの」の格好の例として、犬養はのちに『古事記』の考察を行う。「隠身の神」のふところ深くから出ずる「みことば（みことのり）による造化」という捉え方に、聖書を遙か旅してきたものとして、聖書と響きあう「神の啓示」を感じずにいられないと語る。（犬養、2001、pp.247-51）。この洞察について、注目すべき現代カトリック作家 R.A.ラファティの次のような言明と軌を一にするものがあるだろう。「キリストという黄金は、この世界にくまなく知られている。...（ホメロス、ベルギリウス...）アフリカの民、アメリカ先住民は、その象徴と期待を完全な形で所有していた。...その『誕生』があら

ゆる神話に変化をもたらした。...その探索は、もはや『いつ?』ではなく『どこ?』の問題になった。主の年にあって、あらゆる時が現在なのだ」
(井上、1993、p.375)

- 69. 犬養、1993b、p.241.
- 70. 同上、pp.225-26.
- 71. 同上、pp.237-42.
- 72. 犬養、2003、pp.17-18.
- 73. 犬養、1996、p.49.
- 74. 犬養、1995a、p.36.
- 75. 同上、pp.44-52.
- 76. 同上、p.82.
- 77. 犬養、1996、p.13.
- 78. 同上、p.24.
- 79. 犬養、2003、p.301.
- 80. 同上、p.326.
- 81. 同上、p.327.
- 82. 犬養、1996、p.12.
- 83. 犬養、2002、p.336.
- 84. 犬養、2003、pp.28-29.
- 85. 犬養、2008、p.314.
- 86. 犬養、1996、pp.50-52.

引用・参考文献 (カッコ内年号は該当著書の初出版の年を示す。)

- 犬養道子 (1958) 1978『お嬢さん放浪記』中央公論社
----- 1964『初めに終りを思う』河出書房
----- (1967) 1979『マーチン街日記』中央公論社
----- 1969『旧約聖書物語』新潮社
----- (1970) 1974『花々と星々と』中央公論社
----- 1972『私のヨーロッパ』新潮社
----- (1975) 1980a『男対女』中央公論社
----- 1976『新約聖書物語』新潮社
----- (1977) 1980b『ある歴史の娘』中央公論社
----- 1977『旧約聖書物語：増訂版』新潮社

- _____. (1980) 1984『幸福のリアリズム』中央公論社
- _____. 1981『聖書の天地』新潮社
- _____. (1981) 1985『フリブール日記』中央公論社
- _____. (1983) 1992『人間の大地』中央公論社
- _____. (1984) 1998g『生ける石・信徒神学』岩波書店
- _____. 1986『聖書のことば』新潮社
- _____. 1990『個人と国と国際と』岩波書店
- _____. (1990) 1998h『和解への人』岩波書店
- _____. 1991『ヨーロッパの心』岩波書店
- _____. (1991) 1998i『女性への十七の手紙』中央公論社
- _____. 1993a『世界の現場から』中央公論社
- _____. 1993b『天と地のシンフォニイ』新潮社
- _____. 1995a『聖書を旅する 1：古代史の流れ・旧約聖書』中央公論社
- _____. 1995b『聖書を旅する 2：約と約の間』中央公論社
- _____. 1996『聖書を旅する 3：福音と福音書』中央公論社
- _____. 1997『聖書を旅する 4：女性と聖書』中央公論社
- _____. 1998a『聖書を旅する 5：和のために』中央公論社
- _____. 1998b『犬養道子自選集 1』岩波書店
- _____. 1998c『犬養道子自選集 2』岩波書店
- _____. 1998d『犬養道子自選集 3』岩波書店
- _____. 1998e『犬養道子自選集 4』岩波書店
- _____. 1998f『犬養道子自選集 5』岩波書店
- _____. 1998g『犬養道子自選集 6』岩波書店
- _____. 1998h『犬養道子自選集 7』岩波書店
- _____. 1999『聖書を旅する 6：美術工芸と聖書』中央公論新社
- _____. 2000『聖書を旅する 7：現代問題と聖書』中央公論新社
- _____. 2001『聖書を旅する 8：日本の心情と聖書』中央公論新社
- _____. 2002『聖書を旅する 9：歌う人、祈る人』中央公論新社
- _____. 2003『聖書を旅する 10：聞いて伝えるよいニュース・イエス』中央公論新社
- _____. 2006『こころの座標軸』婦人之友社
- _____. 2008『歴史随想パッチワーク』中央公論新社
- 井上央 1993「ラファティと想像力の伝統」pp.357-79、ラファティ、1993 所収

- 岩下壮一 2015『信仰の遺産』岩波書店
- 内村鑑三 1973『内村鑑三所感集』岩波書店
- . 2015『ぼくはいかにしてキリスト教徒になったか』、河野純治訳、光文社
- 神谷光信 2007『須賀敦子と9人のレリギオ』日外アソシエーツ
- 教皇ヨハネ二十三世 2013『回勅パーチェム・イン・テリス——地上の平和』、マイケル・シーゲル訳、カトリック中央協議会
- 司馬遼太郎 2006『人間について：司馬遼太郎対話選集7』文藝春秋
- 日本カトリック司教協議会 2013a『第二バチカン公会議公文書：改訂公式訳』カトリック中央協議会
- . 2013b「教会憲章」日本カトリック司教協議会、2013a 所収
- . 2013c「エキュメニズムに関する教令」日本カトリック司教協議会、2013a 所収
- . 2013d「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」日本カトリック司教協議会、2013a 所収
- . 2013e「神の啓示に関する教義憲章」日本カトリック司教協議会、2013a 所収
- . 2013f「信徒使徒職に関する教令」日本カトリック司教協議会、2013a 所収
- . 2013g「信教の自由に関する宣言」日本カトリック司教協議会、2013a 所収
- . 2013h「現代世界憲章」日本カトリック司教協議会 2013、所収
- 日野原重明、犬養道子 1997『ひとはどう生き、どう死ぬのか』岩波書店
- ラファティ、R.A. 1993『トマス・モアの大冒険』青心社
- 若松英輔 2012『内村鑑三を読む』岩波書店